

市立函館博物館

研 究 紀 要

第 8 号

1998

市三函館博物館

研究紀要

第 8 号

1998

序

ここに「市立函館博物館研究紀要」第8号を刊行するはこびとなりました。

当館には函館地方をはじめとして道内あるいは樺太地方の植物標本が1万余点所蔵されており、これらの膨大な資料は長期におよぶ整理作業を経まして、平成8年度に蔵品目録「植物篇 植物標本」を刊行いたしました。これらの大半は植物学者として著名な菅原繁蔵氏が多年にわたり採集したものからなり、「菅原コレクション」として知られております。資料整理にあたり、函館植物研究会の宗像和彦氏に多大なご協力をいただき、蔵品目録には解題を執筆していただきました。

本号の巻頭にはこれを踏まえ、「植物学者菅原繁蔵先生のことー北方植物の研究に生涯をかけたその足跡」と題した玉稿を頂戴しました。このご論考により菅原コレクションの集積過程および平行してなされた研究活動の詳細が明らかにされ、ひいては菅原繁蔵という植物学者の研究姿勢やその軌跡が浮き彫りにされております。在野の研究者ゆえの障壁を抱えつつも絶えざる研究意欲に支えられて「地位も名誉も生活すら只々前進をつづけ後からくる次代の人々のために…」(本文から)一心に歩まれた菅原繁蔵氏の姿には多くの学ぶべきものがあります。氏から直接の手ほどきを受けたという著者は、その人となりを紹介するにもっともふさわしい方であります。この場を借りて宗像和彦氏に謝意を表します。

次に当館学芸係長の長谷部一弘による「在サンクトペテルブルグアイヌ資料の研究ーMA 9所蔵アイヌコレクションについてー」を掲載しました。平成7年に当館に対して千葉大学の荻原真子教授からサンクトペテルブルグ人類学民族学博物館に所在するアイヌ資料の調査(文部省科学研究助成費事業)に協力依頼があり、長年、当館において民族分野を担当している著者を派遣しました。資料計測や実測図の作成など限られた日程のなかで精力的な調査活動が行われましたが、本論はその資料調査(平成7・8年度に実施)の成果によるものであります。

本論文では生活用具を中心とした精緻な調査結果が報告されているほか在ロシア資料の主な収集者のピウスツキーと当館所蔵の「アイヌの生活用具コレクション」(国指定重要有形民俗文化財)の収集者馬場脩に関する興味深いエピソードなども紹介されています。本論がアイヌ文化の研究のさらなる進展に資することを願ってやみません。

平成10年3月31日

市立函館博物館長
菅原 繁昭

目 次

序

植物学者菅原繁蔵先生のこと

—北方植物の研究に生涯をかけたその足跡—

宗像 和彦 …………… 1

在サントペテルブルグアイヌ資料の研究

—MA 3 所蔵アイヌコレクションについて—

長谷部 一弘 …………… 17

MA 3 のアイヌ資料…………… 17

アイヌ資料にみる素材…………… 20

函館と在サントペテルブルグアイヌ資料…………… 24

日本における樺太アイヌ資料…………… 26

結び…………… 27

植物学者菅原繁蔵先生のこと

—北方植物の研究に生涯をかけたその足跡—

宗 像 和 彦

1 はじめに

植物分類学者菅原繁蔵先生（1876～1967）は、大正末期から昭和30年代初にかけて北日本の植物、とくに樺太・北海道の分布植物について調査研究を深められ、膨大な採集標本を基に数多くの研究資料と文献を残されている。

そのいずれも、後の植物学界と研究者にとって貴重な価値ある資料とされているが、なかでも樺太分布植物について著された「樺太植物誌（1940）」（全4巻 1,957頁、892 図譜）は、当時まだ研究者による植物調査が十分でなく未知の部分が多かった樺太地域の分布植物について、自らの足でほぼ全域を踏査し30,000点余の採集標本を得て、それを基礎資料として樺太の植物相を解明したものであり、労苦はもとよりであるが、その内容のもつ学術的価値は今なお高く評価されるものである。

この樺太植物の調査では、それが新種と認められ、学名・和名に「sugawara・スガワラ」と付し学界に報告された植物種も多い。

先生の函館での生活は、北海道学芸大学函館分校（現北教大函館校）に講師として招かれた1952年（昭和27年）から郷里山形に戻られる1959年（昭和34年）までであるが、その間も高齢ながら精力的に各地の調査に向われ、「函館山植物誌」（1958）をはじめ数多くの研究文献を著されている。

この「函館山植物誌」は、「函館植物誌」（1932 山本・塚本）とともに郷土函館の植物資料として、数少ない貴重な基礎資料文献である。

また一方、ご自分の信条であるとして、地域の人々の郷土植物への関心と知識の深まりを常に図られ、大学において植物分類と系統学の講義や観察実習で学生に指導するだけにとどまらず、社会人に向けた植物講座の設立にも努められた。

その成果として1953年に市民講座「函館植物愛好の集い」（1955年に函館植物研究会と改称）が誕生した。この講座は当初は図書館行事であったが、後に博物館講座、次に博物館友の会研究部、さらに現在は市の組織からはなれて市民の植物研究団体「函館植物研究会」としてその歩みを続け、先生の設立趣意は世代を重ねて脈々と受け継がれている。

1967年7月、満91才の生涯を郷里で終えられたが、山形に戻られた後も植物研究への情熱は止まず各地に採集に出られ、また北海道にも幾度か来られていた由と聞く。

1969年、残された未整理の腊葉標本10,000点余が子息憲光氏から市立函館博物館に寄贈され、博物館の永年の努力により1996年秋「菅原コレクション」として整理完成された。

先生は尋常小学校卒業後、独学で教員免許を取得、教職勤務の過程で生涯をかける植物学への道に進まれている。研究に必要な諸々の基礎知識や語学等々は勤務の間をぬい、自

ら大学や研究機関に通い身に付けられている。

大学や研究機関に所属することなく、全てが勤務の合間をみての自費による調査研究、時間的にもまた経済的にも艱難辛苦の日々であったと子息憲光氏は述べている。

また大学や研究機関に所属しない研究者が味わった、今一つの苦しみとして…学界というところも、その頃は民間の研究者にはかなり手の届かない場所で、あえて植物ばかりではありませんが、資料を送っている間はどの先生も民間学者を笑顔で迎えてくれるが、一旦その資料を独自で研究しはじめたりすると、急に冷たくなったりすることがあり、こういうことで父も苦しんだようです…とも語っている。

私は「菅原コレクション」の整理でその一助を担った者として、博物館蔵品目録植物篇の初に先生の略歴と主なる研究著書を紹介させていただいた。しかしその内容は、植物を生涯の相手としてその研究に人生の全てをかけ、後世の資となる研究成果を数多く残された「偉大なる植物学者菅原繁蔵」を知るためには、甚だ微なるものと自戒している。

そこで、その際に割愛したもの、また子息憲光氏が博物館に所管を委ねた諸資料と私の手元にある先生の諸著書等を参考に得たその後の新知見を加えてその足跡を記し、人間としての菅原繁蔵先生をより深く知る資となればと考える。

2 辿った道

1876年(明治9年)7月15日

山形県北村山郡東郷村大字白水にて父保蔵、母テツ、の長男として誕生。

・ご両親は農業を営む。

少年時に昆虫採集に凝るが母から殺生だ

と苦言をもらい、次に路傍の草の標本づくりに苦心、今度は殺生にあらずとして、母から押し葉の方法と草木の名をいろいろと教えられたとのこと、著書にも書かれているが、採集にお供した際にもよく話されていた。また母がよく名を知っているので、母が名の知らない草木はないかと探したとも話されていた。

・独学で教員免許を取得。

・山形県各地で小学校教師を歴任。

21才(明治30年)の頃、西村山郡本道寺小学校訓導のとき、モウセンゴケをみつけ植物への関心をより深いものとする。

1901年(明治34年)

北海道に渡る。

一時教職を辞し、ハッカ、ウイキョウ、サフラン、トウゴマ、ジョチュウギク、センキュウ、ワウレン(オウレン)など薬草栽培を試みる。

父上がハッカ栽培に従事したことがあるとのことで、その影響とも考えられる。

1909年(明治42年)

天塩国上築別小学校訓導として、ふたたび教職につく。

その後、湧別などで小学校訓導を経て、中川郡安平志内小学校長となる。

教職に復帰後、昆虫研究への機会と良き指導者を得て、しばらくは昆虫採集研究に勤しむ。

1913年(大正2年)

中川郡安平志内小学校長当時、ヒメギフチョウを採集、北海道で初の報告として、北大松村松年教授により学会誌に紹介される。

1918年(大正7年)

安平志内小学校長として、東京、札幌、旭川など各地の理科講習会に出席し、郷土

- 植物研究の大切さを強く感じ、この年から植物採集と調査に積極的に取り組む。
- 中川・稚内間の植物、札幌付近及び手稲と藻岩両山の植物、羊蹄山の植物、富士山の植物、京都付近の植物、などの採集行に出向く。
- 1921年（大正10年）
樺太への植物採集行で樺太植物に魅せられ、永住探査を決心する。
- 1922年（大正11年）
6月、深草小学校長として赴任、樺太での植物研究生活が始まる。
7月、豊原郊外でエフデタンポポ（新称植物）、オクエゾガラガラ（樺太南半での分布初確認）を発見し、宮部金吾博士により学会に報告される。
- 1925年（大正14年）
8月に摂政宮、高松宮、久邇宮が来島される際にむけて、献上腊葉標本の作成のため樺太庁植民課の嘱託に任じられる。
海馬島・眞縫・泊居・久春内・安別間、眞縫・敷香間、突阻山、などの採集標本を整理作成し、22科、55種、を献上する。
- 1926年（大正15年）
1923年（大正12年）から手掛けてきた、「尋常小学校理科書に於ける植物教材の郷土化研究」（野田教育会）を刊行。
- 1928年（昭和3年）
2月、樺太庁豊原博物館勤務（豊原町、後に豊原市）となる。
9月、郷里山形付近にも採集にでる。
- 1930年（昭和5年）
6月頃、息女の病重く療養のため神奈川県茅ヶ崎に数か月滞在する。
その間、東京周辺の植物研究者との親交を深める。
- 1931年（昭和6年）
史跡名勝天然記念物保存規定（樺太庁令）が施行され、委員に任命される。
「樺太南半植物概況」を刊行
101科 401属 787種 206変種、計 1,040種
標本 2,000点
- 1934年（昭和9年）
「本斗郡植物誌」（本斗教育会）
「樺太の禾本科」
「樺太の木本」を刊行
- 1935年（昭和10年）
「樺太の莎草科」を刊行
12月、樺太植物図誌原稿編纂完了
（全5巻 1,700 P.）
104科 424属 1,292種
腊葉標本 32,000 点
- 1936年（昭和11年）
「天然記念物報告書」（1）（2）
「樺太敷香地方植物誌」
「郷土化せる植物教材研究（尋常科理科書）」落合教育会
「落合小学校を中心としたる植物目録」落合教育会
を刊行
- 1937年（昭和12年）
「樺太の植物」を刊行
12月12日（日）、東京学士会館に於いて「樺太植物図誌刊行記念会」（刊行会）が行われる。
- 1940年（昭和15年）
「樺太植物誌」（I～IV）刊行完了
当初の樺太植物図誌（全5巻）を、樺太植物誌（全4巻）として改編纂、全4巻刊行完了まで、昭和12年から15年までの4年を要した。
- 1941年（昭和16年）
「樺太植物誌」の発刊などの研究功績により、北海タイムス文化賞を受ける。

1944年（昭和19年）

1月7日、スエ夫人逝去される。

- ・樺太教育会より表彰を受ける。
- ・樺太より引上げ、子息憲光氏宅（東京葉山）に寄寓。引上げの際、樺太庁豊原博物館に標本を寄贈する。約 15,000 点。

1945年（昭和20年）

69才の高齢ながら、北方植物とくに日本海諸島の植物研究への意欲から、終戦直前の春、再度北海道に渡り、江差中学校（後の江差高校）教師となる。

- ・利尻、礼文、奥尻の植物調査にあたる。
- ・江差高校に標本を寄贈する。約 5,000点。

1952年（昭和27年）

北海道学芸大学函館分校（現北教大函館校）に生物学教室講師として招かれ、植物分類学・系統学等についての講義を担当される。

1955年（昭和30年）

「日本海諸島植物分布の概要」について、日本植物学会（20回広島）で研究成果を発表する。

- ・日本植物学会で表彰を受ける。

1956年（昭和31年）

「樺太の植物総括偏・地衣類・苔蘚類」
を刊行

「樺太植物の総括」について、日本植物学会（21回札幌）で研究講演を行う。

1957年（昭和32年）

北海道学芸大学函館分校講師を依願退職。

昭和31年12月辞職願提出、

昭和32年2月退職辞令受。

非常勤講師として、植物分類学・系統学についての講義を担当されつつ、研究調査や標本整理をすすめ、各地の植物についての文献資料を表す。

1958年（昭和33年）

「渡島大島・小島の植物誌」

「函館山植物誌」

「北海道植物名鑑」 を刊行

- ・函館市文化賞を受ける。

- ・北海道学芸大学函館分校に標本を寄贈する。

寄贈標本は維管束植物（23,569点）

蘚苔・地衣類を含め約30,000点。

函館分校生物教室の標本室に収納する。

1959年（昭和34年）

「北海道南部の文化財」

「北海道のヨモギ属と小学校植物教材薬用ヨモギ属、ミブヨモギ」

を刊行

- ・北海道文化奨励賞を受ける。

5月、郷里の山形県東根市神町に戻られる。

1960年（昭和35年）

「マキシモウイッチ小伝」を刊行

1962年（昭和37年）

「利尻島の植物」 利尻町教育委員会
を刊行

1967年（昭和42年）

7月、郷里山形県東根市神町でご逝去。

満91才

ご逝去のようすを、ご子息憲光氏は「植物に魅せられた亡父の生涯」のなかで次のように語られている。

…父は去る1967年7月の暑いさ中に、生まれ故郷の縁者に取り囲まれながら、静かに大往生をとげ、「会費を納めなくてもよいのだよ」と喜んでいたその日本植物学会特別会員の老民間学者は、枯木の如く死の床に横たわり、ついに植物の母なる大地へとかえってしまいました。一世紀近くもかかって集めた膨大な遺産、古新聞紙のうず高い山をこの世にのこして…

1969年（昭和44年）

子息菅原憲光氏、市立函館博物館に標本を寄贈する。寄贈標本、約 10,000 点。

その人の一生を、他の人間が自分の思惑で評価や解説をすることは許されない。

しかしご子息憲光氏の次の言葉は、先生の生涯通しての信念と、生き様を語るものである。

…父はこの長年月の間を、地位も名誉も生活すら犠牲にして悔いなく、只々前進をつづけ後からくる次代の人々のためにもと、驚くべき数の植物標本を完成したのであります。

父の後から誰が来るか分かりません。しかし必ず誰かが来るということは間違いのない事実です…

…父は、強烈な現実を生き証人として、黙々と尊い自然科学の下積み的一生を、見事貫きとおした人でした…

3 樺太採集種で、学名・和名に「sugawara・スガワラ」の名が付された植物種

- 1 *Poa sugawarana* H.Koidz.
カラフトソモソモ
- 2 *Poa sugawarana* Ohwi.
カラフトソモソモ(上と別種)
- 3 *Calamagrostis lapponica* Hartm.
folm. *monstruosa* Miyabe et Kudo
スガワラノガリヤス
- 4 *Calamagrostis sugawarana* H.Koidz.
ホソノガリヤス
- 5 *Sasa sugawarae* Nakai
ウラゲカラフトザサ
- 6 *Salix sugawarana* G.Koidz.
ススヤナギ
- 7 *Malandrium offine* J.Vahi.

スガワラピランジ

- 8 *Pulsatilla sugawarai*
Miyabe et Tatewaki
カシポオキナグサ
- 9 *Actinidia sugawarana* G.Koidz.
ススヤマタタビ
- 10 *Taraxacum sugawarai* H.Koidz.
スガワラタンポポ
- 11 *Celastium sugawarai* Koizumi et Ohwi
オクエゾミミナグサ
- 12 *Epilobium sugawarai* Koizumi
オクエゾオオバアカバナ

以上の12種は、当時の権威ある分類学者等がそれぞれに自分の専門分野のなかで、明らかに新種あるいは国内初の植物種として認め、学名や和名に「sugawara・スガワラ」の名を用いて命名したものである。

尚、その後に先生の研究がより幅広く進められる過程で、新種として先生が命名された植物種も数多くあるが、この稿では略させていただく。

4 1955年（昭和30年）以降の研究著書と報告など

先生は、函館在住の期間、この地を樺太に次ぐ研究の第2の根拠地とされ、以前から蓄えてきた資料と構想の整理や新たな調査研究に取り組み、多くの研究物を表し、また研究結果の新知見を講演のなかで発表されている。

これらには、現在でも北海道とくに道南や函館地域の植物を論ずる際には、必須とすべき研究資料が多いが、その中のいくつかをあげてみる。

- 1) 函館山植物誌（1958年）

市立函館図書館叢書

終戦直後の1945年から1957年までの植物調査結果をまとめ、

維管束 103科 356属 618種 29変種 4品種
計 647種

蘚類 16科 23属 36種

苔類 3科 5属 6種

変形菌 9科 16属 29種 3変種

を報告。

これは函館山植物についての初めての調査資料である。

そのなかで、函館山の植物相とその植生がもつ特質とその貴重さについて、「函館山は北方唯一の自然公園であり、全道一の貴重なる戸外文化財として、これを保護し、学術研究・科学新興の淵源たらしむべく努力するは、我ら市民の責務であり、子孫へ伝う遺産である」と述べている。

2) 渡島大島小島の植物誌(1958年)

(=離島大島小島の植物誌)

大島は1952年から1954年にかけて延べ10日間、小島は1952年と1954年に延べ13日の調査結果で、

維管束植物

大島 48科 147種

小島 54科 128種

を報告。

この結果と利尻島など周辺地の植物相と対比し、

利尻島のリシリオダマキは小島に、リシリスゲ、リシリイワデンダは大島に、オオツラフジは函館山と大島に、フギレオオバナノミミナグサは八雲付近と小島に、オニオトコヨモギは青森県権現岬と小島とその対岸に生育することから、

この事実は「小島・奥尻・大島は、余り遠く

ない地質年において陸続であった」という根拠の一つであると論じている。

3) 日本海諸島植物

分布の概要(その2)(1958年)

渡島小島・大島・奥尻島・天売島・焼尻島・利尻島・礼文島・海馬島の分布植物について12年間、延べ210日の基礎調査の結果、

北海道南端から海馬島間の8島に自生するシダ(羊歯)植物以上の植物について

通計 123科 401属 1251種を報告し、

更に、本州・北海道・樺太産で海馬島・礼文島・利尻島に分布されているものと、8島に共通分布されている植物についてまとめ、植物地理学上の参考として、次のように分布植物を整理されている。

(1)海馬島に止まる植物 24科 35属 40種

(2)礼文島に止まる植物 22科 31属 33種

(3)利尻島に止まる植物 27科 29属 43種

(4)海馬島・利尻島・礼文島に共通産の植物
11科 14属 15種

(5)8島に共通産の植物 14科 16属 18種

4) 北海道植物名鑑(1958年)

既刊の樺太植物誌について、先生が第2の使命として編纂途上の「北海道植物誌」から、図版、検索表、出典、参考文献などを削除し、北海道植物名鑑として出版、北海道での自生種、帰化種、栽培種等の網羅を図ったものである。

第1版1,000部は道内僻地の全小中学校に寄贈され、2版は希望者に頒布された。

その後予定された「北海道植物誌」の出版が、諸般の事情で未完であったことに痛惜の念を抱く。

5) 利尻島の植物(1962年)

1940年と1951年に延べ40日の調査結果として維管束植物

90科 303属 515種 12変種 12品種
計 540種

を報告。

また礼文島、海馬島の調査結果についても、比較資料として次のように付記している。

礼文島 87科 301属 508種
海馬島 74科 237属 460種

6) マキシモウィッチ小伝 (1960)

市立函館図書館叢書

日本の植物学の発展に多大な貢献と影響をもたらした、東亜植物の研究で著名なロシアの植物分類学者カール・ヨハン・マキシモウィッチ (1827~1891) は、東亜植物の調査途上で1860年9月に函館を訪れた。

マキシモウィッチは翌1861年11月までの1年余り函館に居をおいて、雇用した日本人須川長之助の手をかりて函館を中心とした道南地域での採集調査を行った。その後1963年2月まで日本各地を訪れて数多くの植物標本を集めたが、その中には当時としては未だ学術上の名(学名)をもたない植物種が多く、マキシモウィッチにより命名された植物種も多数であった。日本の植物でマキシモウィッチの命名によるものは260余種に及んでいる。

1960年はマキシモウィッチが函館を訪れて100年目に当たる事からそれを記念し、マキシモウィッチの生涯と日本植物学界に残した業績を詳細に著された。

7) 講演発表されたもの

函館植物研究会講座では、ご自分の今までの諸研究の概要とその後の補足、最近の調査研究結果などを講演され、人々の植物への興味関心の高まりや研究の勧めに努められた。

その中から1958年に講演されたものをあげると

- (1) 北海道南部の帰化植物について
- (2) 函館山麓のシカギクと

コシカギクについて

- (3) 函館のヨモギ属と小学校植物
教材薬用ヨモギについて
- (4) 函館山と北海道のトクサ科について
- (5) 北海道のケショウヤナギについて
- (6) 函館山と北海道の

Verbscum 属について

- (7) 1958年度の植物新報知の総括(その1)
- (8) 再び大島・小島の

植物分布の概要について

である。

一年間で8回もの講演をされ、そのいずれも単なる講義ではなく、研究発表という内容が主となっている。

これは先生の日々が、植物相手の弛まぬ研究の歩みであることを示すものであろう。

5 菅原先生と植物標本

植物の分類と分布に関わる研究にとって、腊葉標本は種の同定と記載、また根拠(証拠)や後の研究資料などとして必須物である。

菅原先生は、その植物研究の資料として膨大な数の植物標本をつくられたが、その数は著書に記されたものだけを概数的にみても、実に60,000点となる。

この数は、機械的に1日3点として連日続けて55年を要する数である。

しかし腊葉標本の一般的な作成過程は、植物体を新聞紙に挟み、その上下に乾いた新聞紙を積み、上から重しをかけ、数日間は1日に2~3度の新聞紙交換、それを植物体が乾燥するまで継続し、乾燥後は台紙に形を整え

て貼付し、ラベルに必要な内容を書き入れて完成となる。

これを知って、60,000点という標本数をみると、あらたな驚きを感じる。

更に、標本作成前の採集調査、得た標本資料を基にする研究のまとめ、などに要する労力や時間などを考え合わせるとき、強烈な執念で生涯の全てを植物にかけ、超人的な気力と体力で突き進んだ学者菅原繁蔵の姿が見えてくる。

子息憲光氏は前述の「植物に魅せられた亡父の生涯」のなかで

…この父の一生というものは、すべての生活を北方植物に捧げつくした草狂人の歴史と申してよいでしょう。それは世にも稀なる人間記録にちがいません…

と記している。

先生は、作成された腊葉標本を、その地域に資するとして数多く寄贈されているが、その寄贈先と数について記録などから知る限りは、次のとおりである。

1944年	樺太庁豊原博物館	約15,000点
1952年	江差高等学校	約 5,000点
1958年	北芸大函館分校	
	維管束植物	23,569点
	蘚苔・地衣	約 6,000点
1969年	市立函館博物館	約10,000点

上記について、樺太博物館での現状は不明であるが、ロシアは博物資料に関する関心が高いと伝えきくので、終戦前後の混乱で散逸が免れた場合には、いずれかに保存されていると希望的に考えたい。

江差高校のものについての保存状況は未確認である。

北芸大函館分校（現北教大函館校）の標本は、1991年に北大農学部に移管されている。

函館博物館のものは「菅原コレクション」

として整理所蔵されている。

尚、先生の研究の中核資料となる標本は、当時の北芸大函館分校（現北教大函館校）に寄贈のものにはほぼ含まれ、「sugawara・スガワラ」の名が付された基準標本（タイプ標本）もその中にある。第2の研究地である函館にと強く望まれての寄贈であったが、移管の経緯はともかく、北方植物研究の資料として適切に保管され、後の研究者に資されるのであれば先生のご遺志は生きると考えている。

6 おわりに

先生に関わる諸資料に目を通してると、思いは40年前に駆けもどり、羊蹄山にご一緒し、急斜地なので先生のザックを背負いましょうと声をかけた際に、「ありがとう、でもリュックを背負ったまま半世紀過ごしたから、これがなければ体がふらふらしてだめなんだ」、「助けてくれるなら後ろから腰を押してくれよ」といわれ、汗だくで押し登ったことなどが次々と思いだされ懐かしかった。

北方植物の解明を自己の信条として、ひたすらにその道を歩かれ、函館を第2の研究の場としてこの地を愛された菅原繁蔵先生の生涯を、お世話になった者の一人として私の手に入る範囲の資料で追ってみた。

また、菅原コレクションの目録で記した略歴等で、その後間違いと判明した部分はこの稿で修正させていただいた。

しかし、私が先生のご指導を得るようになったときのお年は既に80翁に近く、年代差もあり、また主なるご研究の場は樺太という今では遠い地でもあることから、その地での先生の歩みの事々は、時折の思い出ばなしで断片的に聞きしたのみである。

したがって記した内容には、まだまだ不備

や不足が多いと考えられる。その点ご容赦いただき、ご指摘いただければ幸せである。

(函館植物研究会 副会長)

[付記] 参考とした資料等について

- 1 子息憲光氏が博物館に所管依頼の諸資料
- 2 植物に魅せられた亡父の生涯
講演集 寒川光太郎
- 3 郷土動植物資料展出陳目録 (1960)
市立函館図書館
- 4 樺太植物誌 (全4巻) (復刻版)
- 5 樺太の植物 (総括篇・苔蘚篇・地衣篇)
- 6 樺太植物の総括 (学会講演要旨)
- 7 日本海諸島植物分布の概要 (2)
- 8 函館山植物誌
- 9 離島小島大島の植物誌
- 10 北海道植物名鑑
- 11 マキシモウイッチ小伝
- 12 利尻島の植物 (原稿)
- 13 北芸大紀要 (第二部) 10巻2号
菅原繁蔵収集腊葉標本目録 (1959)
4 ~ 12 は菅原繁蔵著



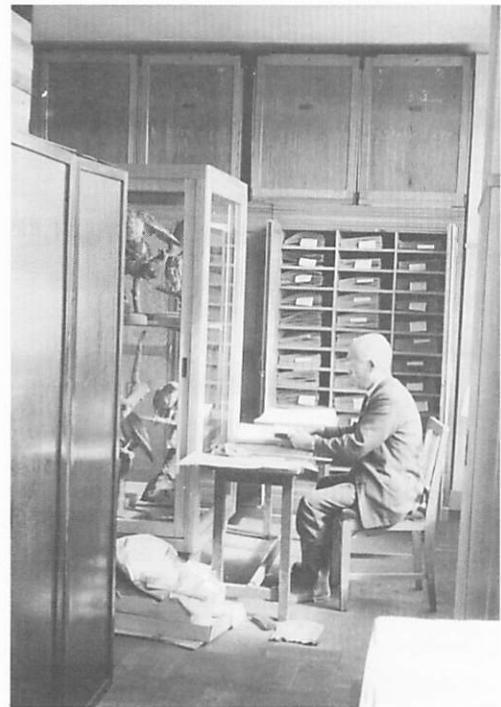
植物研究会の観察会風景
(函館市赤川地域)
中央：菅原繁蔵先生
昭和32年9月16日



植物研究会の観察会風景
(函館市赤川地域)
中央：菅原繁蔵先生
昭和32年9月16日



北海道学芸大学函館分校の生物教室の
標本室に収納された標本棚と標本

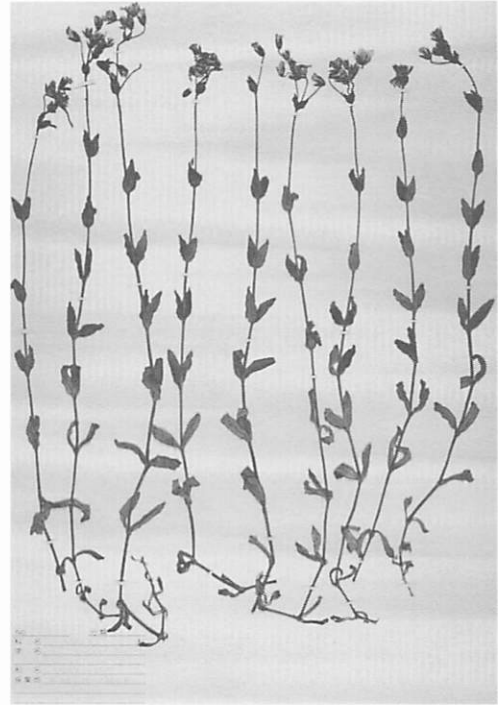


昭和33年秋 標本室で標本整理をする
菅原繁蔵先生(当時82歳)

菅原繁蔵氏命名による植物（菅原コレクションより）



ヒカゲノカズラ科 Lycopodiaceae
ハリトウゲシバ
Lycopodium serratum Thunb. var. *cifolium* Sugawara



ナデシコ科 Caryophyllaceae
サムカワミミナグサ
Cerastium asamukawaensis Sugawara



バラ科 Rosaceae
コジマキンバイ
Potentilla Kozimaensis Sugawara

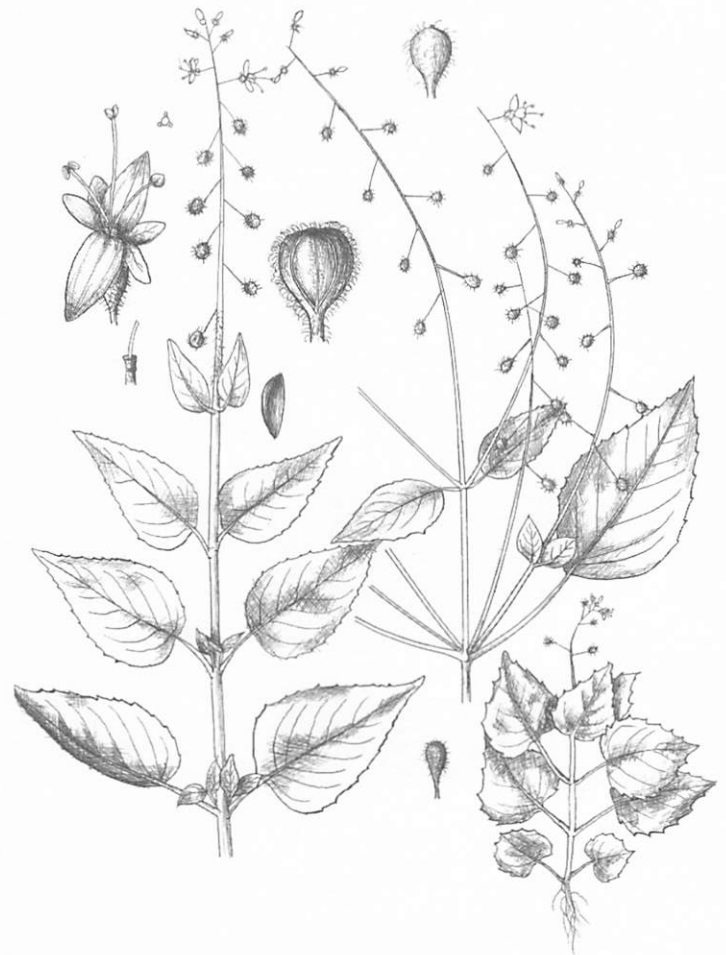


マメ科 Leguminosae
オオシマモメンヅル
Astragalus osimensis Sugawara

菅原繁蔵氏自筆植物画



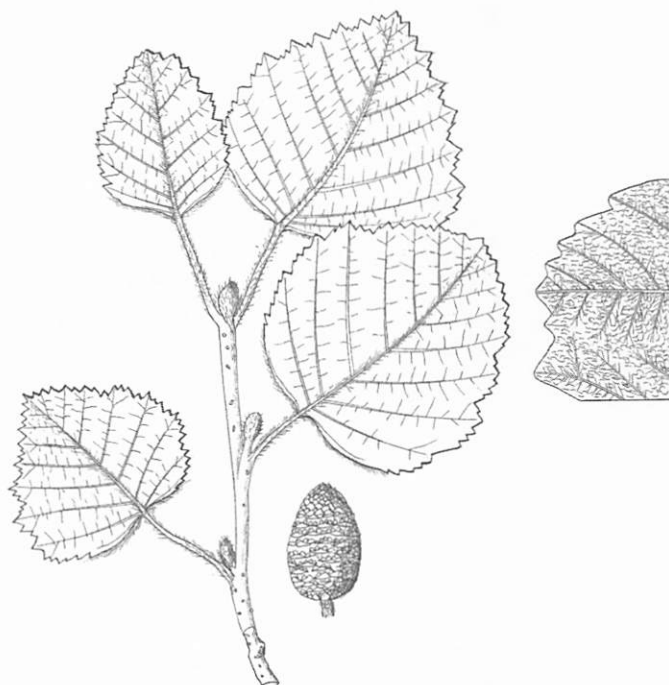
スミレ科 *Violaceae*
スミレ属 *Viola* sp.



アカバナ科 *Onagraceae*
ミズタマソウ属 *Circaea* sp.



ニシキギ科 Celastraceae
ツルウメモドキ属
Celastrus sp.



カバノキ科 Betulaceae
ケヤマハンノキ
Alnus hirsuta Turcz.



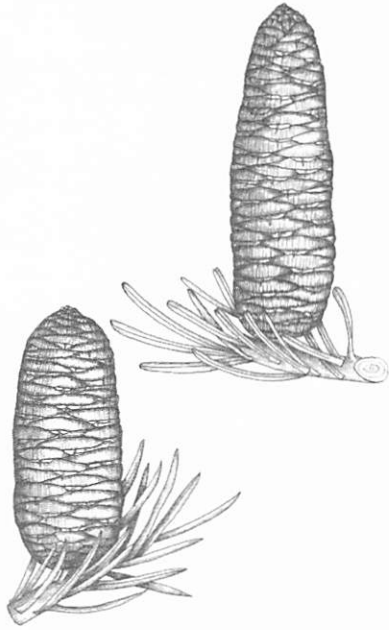
ニシキギ科 Celastraceae
ヒロハツリバナ
Euonymus macropterus Rupr.



マメ科 Leguminosae
トドシマゲンゲ *Oxytropis*
todomoshiriensis Miyabe

マメ科 Leguminosae
オヤマノエンドウ属 *Oxytropis* sp.

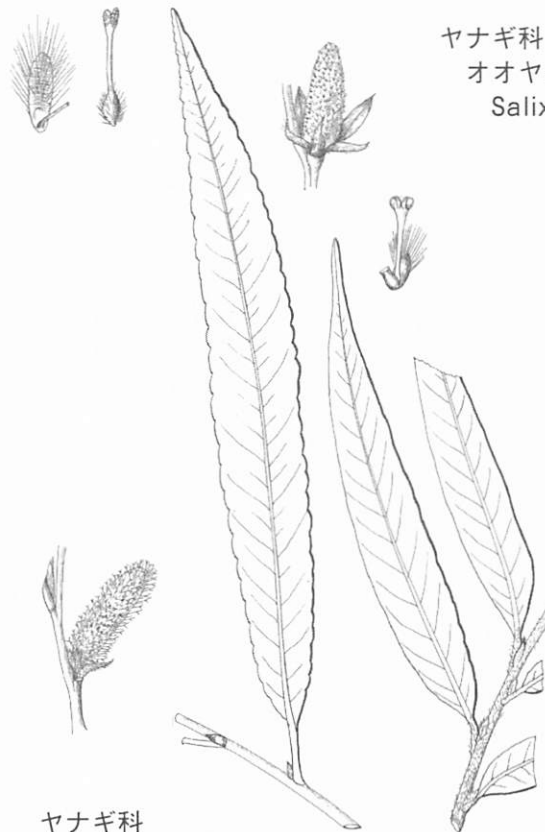
チャセンシダ科 Aspleniaceae
コタニワタリ *Phyllitis scolopendrium* (Linn.) Newm.



マツ科 Pinaceae
アカトドマツ (トドマツ)
Abies sachalinensis (Fr.Schm.) Masters

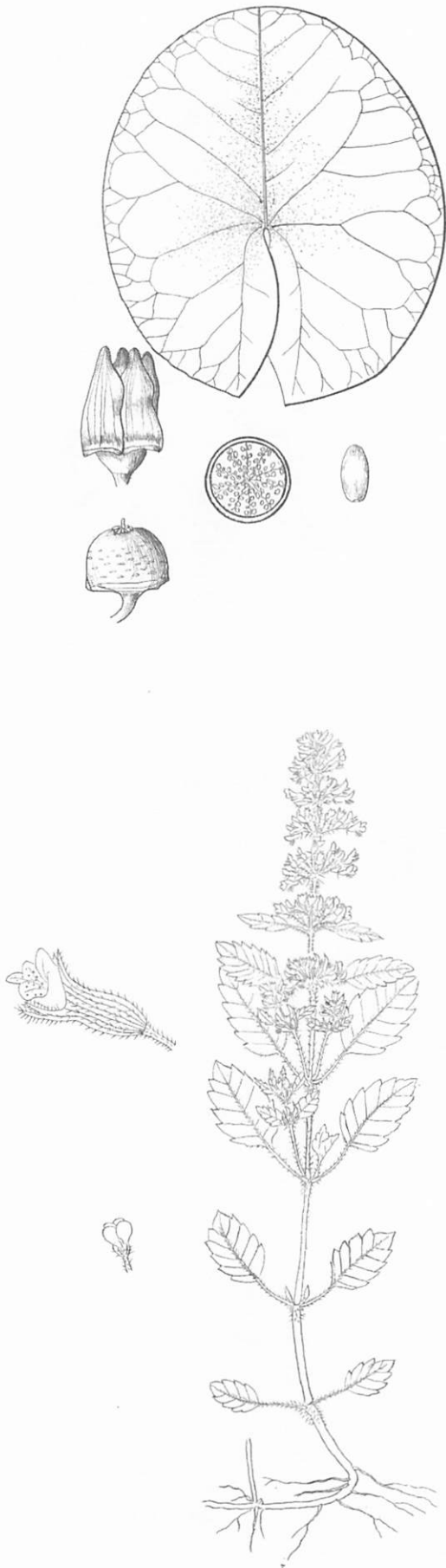


ヤナギ科 Salicaceae
オオヤチマメヤナギ
Salix poronaiensis Kimura

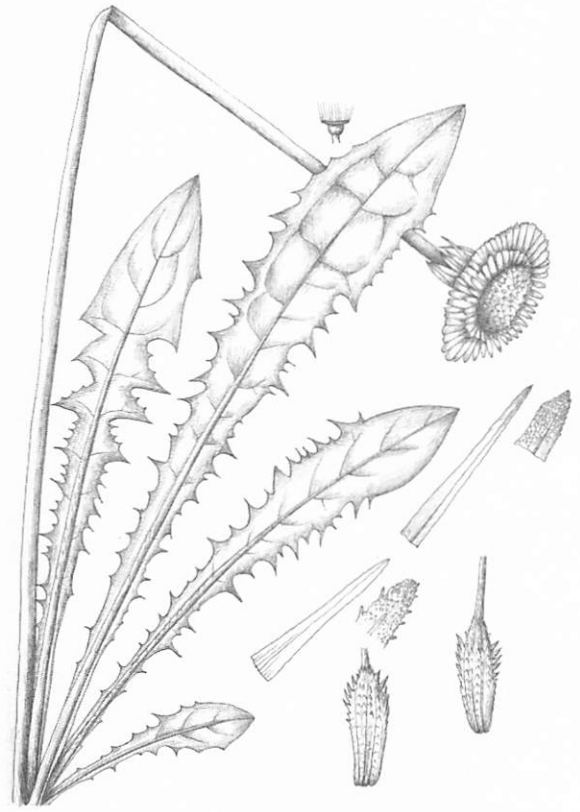


ヤナギ科
ナガバヤナギ
Salix sachalinensis Fr.Schm.
forma *aequitriens* Kimura

キヌヤナギ
Salix kinuyanagi Kimura



スイセン科 Nymphaeaceae
ヒツジグサ *Nymphaea tetragona*
Georgi var. *angusta* Casp.



キク科 Compositae
タンポポ属 *Taraxacum* sp.

シソ科 Labiatea
トウバナ属 *Cluipodium* sp.

在 Санкт Петербург アイヌ資料の研究

—M A Э 所蔵アイヌコレクションについて—

長谷部 一弘



Санкт Петербург 人類学民族学博物館

＜M A Э のアイヌ資料＞

ロシア連邦科学アカデミー所管の Санкт Петербург 人類学民族学博物館 (РОССИЙСКАЯ АКАДЕМИЯ НАУК Музей антропологии и этнографии им.Петра Великого 略称：M A Э) における二カ年におよぶアイヌ資料の民族学的調査は、北海道、サハリン、千島地域のアイヌ資料約1,400件という膨大な資料の確認をもたらした⁽¹⁾。これらの資料は、古くは1740年代以前のピョートル一世によるクンストカメラ (Кунсткамера) 時代に収集されたものから1947年の第二次世界大戦後に収集されたものまで実に二世紀にまたがる収集資料である⁽²⁾。収集されたアイヌ資料は、ロシア民族学、博物学の先達レオポルド・イワノヴィッチ・シュレンク、レフ・ヤコヴレヴィッチ・シュテルンベルグらを含む収集者によりおおよそ25のコレクションからなり、収集地には、北海道の函館、敷生 (現白老町)、サハリンのマウカ、ナイブチ、ナヨロ、セトロ、シスカ、

タライカ湾、シラハマ、ニイトイなどが具体的収集地としてあげられる。その中でロシアの民族学者プロニスワフ・ピウスツキーによって1903年から1914年にわたり北海道、サハリンで収集された六つのアイヌコレクションが、全体の約8割を占め、北海道、樺太アイヌ資料の充実が目立つ。

約1,400件にのぼるM A Э 所蔵のアイヌ資料は、生活用具の性格上おおまかに信仰・儀礼用具、狩猟・漁撈・採集用具、調整・加工用具、調理・調度用具、収納具、運搬・補助具、楽器、喫煙具、服飾具、玩具、住まい、絵画・習字・書類、加工材料等に分けられ、千島、サハリン、北海道という地域を異にしたアイヌにおける生活用具のほとんどを網羅している。以下に、その特質を示す資料内容を具体的に列記紹介してみたい。

収蔵資料のうち精神文化を象徴する信仰・儀礼用具は、その多数を占め、捧酒篋、木幣を中心にクマ送り儀礼等に関わる資料が目を引く。特にヤナギを材料としたクマの飾り背負い帯であるポンパケは、雄雌用があり、神の国への土産として食物、マキリ、スキーなどを携えている。占い・祈願具として用いられた陸獣を主とする頭骨は、エゾオオカミ、キツネ、イヌ、ウサギ、カメ、アホウドリにおよび、中でもエゾオオカミの頭骨は、在日本資料にほとんど類をみない稀少資料である。また、箱形の神棚や「天照皇大神宮」のお札は、伝統的な信仰観を有しながらも和人社

に組み込まれていったアイヌの歴史的状況を示すものである。

狩猟・漁撈・採集用具は、シカ、クマ、テン、キツネなどの陸獣、アザラシなどの海獣、サケ、マスなどの魚類、海鳥捕獲に用いられたもので実物資料のほかに模型として製作されたテン捕り用仕掛け罟等が多様に存在する。とりわけ、キテ（鉞）のほかアザラシ猟の際に使用するアザラシの休憩場を意図的に海面に浮かべる木製のおとり板や松枝で作られたカモフラージュ用盾は、初見のものである。さらに冬期の氷原における海獣狩猟具として先端に舌状の滑走面を有する滑走鉞、海獣骨による逆円錐状の頭部をもつ鳥打ち矢は、樺太、北海道アイヌの自然環境を捉えた有効な狩猟手段を物語る。漁撈具に関しては、マレツ（突き鉤）、釣針、建網、テシ模型などがあり、特異なものとして先端が三叉状を呈するウニ採り具がある。また、採取用具としてオオバユリ根の掘り具、カワシンジュガイ製の穂摘具がある。

調整・加工用具は、日常生活用具を作り上げるものとして多岐にわたっている。主なものをあげれば、服飾製作に関わるものとして、アットゥシ織り機、イラクサ織り機、エムシア織り機、帯織り機、糸巻き、紡錘車などがあり、中でも樺太アイヌの衣服であるレタルペ用のイラクサ織り機は、オサにそのまま糸が通されたほとんど実見することができない稀少資料である。また、最も注目される資料のひとつに樺太アイヌの鍛冶用具がある。確認された鍛冶用具は、木製箱形フィゴ、羽口、火掻き棒、カナシキ、クサビ、ヤットコ、タガネ、カナヅチの用具一式からなり、明治期の樺太アイヌにおける製鉄技術の存在を裏付けている。その他、テンの尻尾など獣皮のなめしや乾燥に使用した皮革加工具、クマ肉吊

し用などのクマ肉処理具も含まれる。

調理・調度用具は、身近な身の回りの生活必需品や祭礼時等に利用されるもので、器面に調理痕を留める盛り付け用のイタ（盆）、鉢、匙、フォーク、枕などの寝装具、松明の照明具、行器、耳盥などの儀礼の際の調度具、ゆりかごなど広範囲にわたり、背中がかゆい時に使用する孫の手やへら状の雪かき具も現存する数少ない調度用具のひとつである。この中には、函館ハリストス正教会の司祭を勤めたアナトリーの手を経たイタも含まれている。

収納具は、加工用具をはじめとする日常使用される貴重品を納めておくもので、大切な女性の手仕事の道具としての針入れや調理に欠かせない素材のための油入れ容器などが含まれ、世界的にも数少ない千島アイヌのテンキグサ製ムリッチもそのひとつとしてある。

運搬・補助具は、模型を含め陸地、海洋用の船、櫓、イヌ櫓用具、かんじき、スキー、ストック、背負い縄と老人用杖がある。船は、そのほとんどが模型で、外洋船イタオマチ（板綴船）をはじめとしてクジラヒゲ等の結束素材を含め船体構造を極めて正確に復元しているものである。樺太アイヌのイヌ櫓用具は、12頭用の鈴、スイベル（よりもどし）付イヌ連結革帯や櫓制御棒、イヌ用頭飾り、留め具、首輪が一連の資料としてある。冬期の移動用運搬補助具として利用されたかんじきは、固雪用のチンル、柔雪用のテシマがあり、加えてひょうたん形を呈する従来の固雪用チンルの形態に木製板状の両耳を備えた新たなタイプのかんじきが存在することを確認した。なお、かんじきは、元来樺太アイヌでは一般に用いられなかったようであり、サハリン⁽⁴⁾西海岸マウカ収集のテシマも、「エゾ島からの借用」として記録されている。

アイヌ文化の音色を伝える楽器は、サハリ
ン西海岸のムックリ、トンコリの弦楽器があ
り、トナカイの腱によって製作されているト
ンコリ弦も添えられている。

嗜好品として使用された喫煙具は、自製の
サビタ製イキセリ、樺太アイヌの滑石製シマ
キセリの煙管、サケ皮製火打ち入れ具がある。
その中には、移入品と考えられるアヘン用の
水煙管なども含まれている。

収蔵資料の中でもその多くを占める服飾具
は、衣服、下着、装身具、被りもの、履き物
などにおよぶ。衣服は、オヒョウ、シナ製樹
皮衣、イラクサ製草皮衣、ルウンペ、カパラ
ミャ、チカルカルペの木綿衣、アザラシ製獣皮
衣、サケ製魚皮衣、和製着物などがあり、特
に、1826年のロシア帝国海軍省による千島収
集のオヒョウ布地にイラクサ糸で襟、袖等に
施文された樹皮衣や1904年（明治37年）のピ
ウスツキー収集資料カパラミャの存在は、こ
れまでの衣文化における製作技法と製作年代
を大きく塗り替えるもので、これまで製作起
源を大正期としてきたカパラミャを明治期ま
で遡らせることとなった。また、樺太アイヌ
の特徴的な防寒用イヌ橇搭乘スカート状腰当
てや和人からの移入品である木綿製着物など
もみられる。下着は、男性用褌、股引、女性
用下帯があり、服飾文化の中でも見過ごされ
がちな下着の存在を示す貴重な発見である。
褌は、樺太アイヌのイラクサ製、北海道アイ
ヌの木綿製のものがあり、日本国内では未確
認の資料である。女性用下帯である樺太アイ
ヌのチャハチャンキ、生理用下帯、子供用お
むつも数少ない資料として収集されている。
服飾具の中には、信仰、儀礼に大きく関わる
資料もみられ、腹痛等治癒目的のお守り、身
体保護に使用された木綿製腹帯、胸帯、乳帯、
妊婦帯がある。これらには、護符として帯の

要所に木製のマキリミニチュアやイナウ飾り
などが付されている。また、服飾具の中でも
その多くを有する帽子は、防寒具、狩猟用偽
装などを目的として使用されたものが目立つ。
中でも、樺太アイヌの海鳥胴部の羽毛、毛皮
素材を帽子に仕立てているものや鳥羽とテン
などの獣皮によって製作されているものは、
防寒機能を兼ね備えた狩猟手段として用いら
れた数少ない被りものである。ヤナギの削り
かけに撚りをかけて巻かれたいわゆるイナウ
笠や日除け用目覆いも数少ない樺太アイヌの
特徴的な被りものとしてある。履き物は、サ



鳥羽帽子、イナウ笠などの服飾具

ケ、アザラシ等の魚皮製、獣皮製靴、ブドウ
ズル製草鞋がある。これら履き物の使用方法
を具体的に示すカンジキに取り付けられたケ
リヤスゲ製義足に草鞋を履かせた資料の存在
も、注目に値する。その他多彩なアイヌの服
飾文化を物語る資料は、カニクッ（シャマン
用金輪付帯飾り）、首飾り、頸飾帯、耳飾り
等々多岐におよんでいる。

玩具は、ピウスツキーが何よりも子供好き
であった片鱗を伺わせるかのように多種多様
にわたっており、意図的な玩具収集の痕跡を
垣間見ることができる。木製の玩具は、単純
に遊具としての機能を持つもののほかに弓矢、
マキリ、輪付き棒、紡錘車など将来の実生活

に役立つための子供の手習い具の機能をもっているものが多く、矢筒などのように子供用のお守りとする機能を備えた遊具となっているものまでみられる。また、これらの玩具の中には、ウコニルシペと呼ばれる方形陣取りゲーム、カッコウ操り遊具（鳥形玩具）、ブンブン独楽など日本には現存せず、アメリカのブルックリン美術館、ドイツのベルリン国立民族学博物館等に数点確認されている数少ない玩具も含まれる。⁽⁵⁾

コタンの住まいに関わる資料は、家屋、倉、クマ飼育檻、イヌつなぎ棒、魚干し棚、狩り小屋などほとんど北海道アイヌ、樺太アイヌのコタンを形成している施設模型である。アイヌの家屋であるチセは、それぞれ北海道アイヌ、樺太アイヌ家屋を模型によって復元したもので、炉裏をはじめとする内部構造や家屋骨組みに至るまでいずれも精巧に製作されている。とりわけ壁板に土を塗り固めた四角錐型家屋を模した樺太アイヌの冬用家屋トイチセや樹皮で葺いた夏用家屋サハチセは、他にほとんど類をみない資料である。祭壇、イヌつなぎ施設、クマ飼育檻模型もまた、樺太アイヌのコタン形成と生活様式を特徴づけるものである。⁽⁶⁾

また、ロシア民族学の体系的な資料収集目的を明確に示すかのようにこのようなアイヌ民族の個々の生活用具に加え、これらを産み出してきた原素材および加工材料も一連の貴重な資料として収集されている。植物性素材は、衣服、物入れ、敷物、履き物などの材料となるオヒョウ、シナ、イラクサ、ハルニレ、ハンノキの樹木、樹皮、糸、紐、ツルウメモドキ糸、テンキグサ、ブドウヅル、スゲ、ガマ、カヤや食材としてのオオウバユリ、ウバユリ団子などが確認され、中でも、端部を三つ編み状に編み込んだスゲの繊維束は、靴の

中敷きとして必要量に応じてむしり取って使用する、類例のない貴重な素材である。動物性素材は、アザラシ、トド獣皮、サケ、マス、イトウ魚皮、トド陰茎、カジキマグロ骨、トド脂、ニシン脂、貝殻等々があり、衣服、履き物の素材をはじめトド脂の食材、ニシン脂の灯明用素材におよんでいる。なお、これに関わる生活用具における詳細な素材については、改めて次項で触れたい。

この他、アイヌに関わる絵画・習字・書類関係資料として、幕末、明治期におけるアイヌ風俗画の第一人者である平沢屏山の門下として活躍した木村巴江の筆による「昆布採集の図」、「サケ漁の図」などのアイヌ風俗画やピウスツキーと接触のあったノムラ・シュハンラムなど白老ゆかりの人々の習字、書類等が残されている。

＜アイヌ資料にみる素材＞

今回の調査では、資料の計測、写真撮影のほか資料観察の見地から実測図の作成を試みた。この結果、調査成果の一つとして個々の生活用具における素材同定確認がなされ、自然環境を媒体としたアイヌの伝統的物質文化が、民族接触をも取り込んで育んだ具体的諸要素を知る手がかりを得た。

アイヌの服飾、信仰儀礼、調度、調整加工等に代表される生活用具の素材依存は、自然環境と周辺諸民族との接触に起因し、その主な対象に動植物素材、金属素材、加工移入品がある。とりわけ、北東アジア域の陸性、海洋性生態分布相を形成する動植物は、広く同地域に居住する北方民族の生活形態に深く影響を及ぼし、収集されたすべての資料からは、北海道、サハリン、千島におけるバリエーションに富んだ独自の文化形態と針広混交林帯の自然環境に育まれた北東アジアにおけるアイ

ヌ文化の地域的特性を読みとることができる。以下にアイヌの生活用具にみる主な対象使用素材の調査結果をもとに、その具体的事例内容を紹介したい。⁽⁷⁾

木幣、捧酒籠、護符に代表される信仰・儀礼用具は、おもに植物素材としてヤナギ、サルヤナギ、マツ（エゾマツ）、エリマキ、クルミ、サビタ、オンコ、サクラ、ナラ（ドスナラ）、オヒョウ、シナ、ヒョウタン、フトイ、ガマ、イラクサ、トリカブト、動物素材としてキツネ、ジャコウジカ、オオカミ、クマ（ヒグマ）、カニ、フクロウ、アホウドリ、ウサギ、イヌ、カメ、加工移入素材として木綿、ガラス等が確認された。中でも、ヤナギは、信仰・儀礼用具の主たる素材をなし、信仰対象とするキツネ、ジャコウジカ、クマ（ヒグマ）、フクロウ、ウサギ、オオカミ、カメ、アホウドリ等鳥類の頭骨・皮革・爪・羽などをそのまま信仰・儀礼の象徴として使用していることがわかる。また、イラクサ、オヒョウ、シナ、木綿は、おもに用具の結束糸素材として部位要所を巻結している。

狩猟・漁撈・採集用具では、おもな植物素材としてマツ（カラマツ）、オヒョウ、シナ、オンコ、シラカバ、ヤナギ、ツルウメモドキ、クルミ、サクラ、ホオノキ、チシマザサ、イラクサ、アシ、タケ、カヤ、ワラ、動物素材としてクジラ、トド、アザラシ、シカ（エゾシカ）、ヒグマ、ウマ、サケ、ワシ、金属素材として鉄、銅、真鍮、加工移入素材として木綿、麻等がある。特に、鉄は樺太アイヌの銚用、クジラ肋骨は千島アイヌの矢用に使用されている事例が示すように、それぞれの海獣狩猟をおもな生業としながらも地域を異にした典型的な素材選択の相違をみることができる。また、離頭銚の紐としてアザラシ、トドの皮革を用いているものやイラクサ、ツル

ウメモドキ、クジラヒゲ、シカ等の腱の糸によって接合部位を結束している例が多くの資料にみられ、特に魚捕獲用網の場合、イラクサに撚りをかけて製網しているものが顕著に認められる。

日常の生活用具を製作、加工する調整・加工用具には、植物素材にマツ、シナ、オヒョウ、クルミ、エンジュ、サクラ、ヤナギ、シラカバ、カツラ、ネマガリダケ、センノキ、イタヤ、エリマキ、イラクサ、テンキグサ、ツルウメモドキ、ガマ、アシ、動物素材にアザラシ、シカ、クジラ、サケ、ワシ、金属素材に鉄、加工移入素材に木綿等が用いられている。マツは、エゾマツ、トドマツ等比較的入手が容易で加工がしやすいため他の生活用具と同様需要の高い消耗品に広く一般に活用された素材であり、クルミなど糸巻き用にみられるように、ある程度堅めの素材を選択している例も確認される。また、シラカバ内皮は、植生分布に比例しながらマキリの鞆等の使用にみられるように耐水性と容易な加工素材として樺太アイヌに比較的多く利用された素材である。また、金属素材である鉄利用事例のヤットコ、タガネ等鍛冶用具一式は、前述のとおり伝統的な樺太アイヌにおける鍛冶製鉄技術の存在を裏付けている資料である。

調理・調度用具は、植物素材としてカツラ、ホオノキ、クルミ、センノキ、サクラ、シラカバ、マツ（エゾマツ）、ヤナギ、サルヤナギ等が用いられている。その中で、サルヤナギの根は、サハリン東海岸収集のひしゃくにみられるようにシラカバ内皮を折り曲げた後に樹皮器面に通して綴じるために使用されるもので、アイヌのみならずウイльта、ニヴフ、ナーナイ等シラカバ容器の製作技術を有する北東アジア諸民族に共通してみられる手法である。なお、樺太アイヌの食器は、一般に他

の樺太アイヌの生活用具と同様多くのシラカバ、ナナカマド等を主な素材とする傾向がある。⁽⁹⁾

食料、小道具等を入れるための収納具は、植物素材にシラカバ、テンキグサ、イラクサ、ヤナギ、サルヤナギ、モミ、オヒョウ、シナ、ホオノキ、ガマ、アシ、ツルウメモドキ、動物素材にアザラシ（フイリアザラシ）、トド、クジラ、シカ、マス、加工移入素材に木綿、絹、ビロード等が認められる。動物素材のアザラシ、トドの胃袋は、生状態で摘出後脂肪入れ容器にするため形を膨らませて整形、乾燥製作したもので、樺太アイヌ生活様式における海獣狩猟依存度の大きさを物語る。樺太アイヌの海獣狩猟は、主に東海岸でアザラシ、西海岸でトドを捕獲対象とした。また、浜辺に自生するテンキグサの利用度は、樺太アイヌ、千島アイヌにおよんで袋物、かごとして活用されている。千島アイヌの編みかごは、ムリッチと呼ばれ北米アイヌイットのバスケット製作技術に共通点を見出すことができる。これらすべての収納具の縫合要所には、丈夫で頑強なイラクサ、ツルウメモドキ、クジラヒゲを糸として用いており、特に樺太アイヌの場合、収納具に限らず想像以上に部位要所等に多数のイラクサを使用している傾向があることがわかった。

住まいに関わる生活用具には、植物素材としてマツ、シラカバ、ガマ、スゲ、イラクサ、オヒョウ、シナ、ナラ、ヤナギ、テンキグサ、カヤ、ブドウヅル、加工移入素材として木綿等が使用されている。この中で、家、クマ檻、狩小屋など住まいに関わる模型が10点確認され、マツ材に粘土質土壌を塗り固めた樺太アイヌのトイチセやサハチセなど現資料に使用される素材をそのまま活かし忠実に模型復元を行っている。なお、サハチセは、白浜のア

イヌ資料調査によると、軸組材にトドマツ、外壁にエゾマツ、留釘にラクヨウマツ、部材の結束に水に漬け柔らかくなったトドマツの細根を使用している。⁽¹⁰⁾

イヌ櫓等に関わる運搬・補助用具は、植物素材にシラカバ、マツ、カツラ、サクラ、ブドウヅル、イラクサ、オヒョウ、シナ、クワ、クルミ、ヤナギ、ツルウメモドキ、テンキグサ、動物素材にアザラシ、トド、ウマ、クジラ、シカ、イヌ、加工移入素材に木綿、金属素材に真鍮などがある。特に、樺太アイヌのイヌ櫓に関わるイヌつなぎの首輪、紐、イヌ用頭飾りには、頑丈なアザラシ皮を使用しており、つなぎ部皮革の組み紐加工処理状況観察からなめし直後に製作されていることがわかる。加えて、イヌ用頭飾り頂頭部は、ウマの毛（尻尾）を素材に束ねた飾りを付していることが確認され、これまで素材不明であった市立函館博物館所蔵の樺太アイヌ資料を比較同定することができた。⁽¹¹⁾また、8点の船模型のうち外洋船であるイタオマチは、細く裂いたクジラヒゲ糸やイラクサ糸でマツ、クルミ材の舷側部つなぎ目を綴じ、舳先には、ヤナギ製のイナウが据えられているなど素材を吟味した精巧な作りの復元模型である。

収集数が乏しい楽器は、シャマン用太鼓、口琴などでいずれも樺太アイヌの資料である。サハリンは、樺太アイヌ、ニヴフ同様トナカイ飼育を主な生業とするウイльта民族の居住する地域でもある。動物素材のトナカイ皮がシャマン用太鼓の打面に使用されている事例は、サハリンを舞台とした樺太アイヌ、ウイльта間での民族接触の一端を伺わせる。

玩具は、資料の多くをサハリン西海岸、東海岸に求め収集されている。植物素材にタケ、マツ、シナ、イチイ、クルミ、ヤナギ、ツルウメモドキ、イラクサ、カヤ、動物素材にワ

タリガラス、金属素材に針金などが使用されている。これら一連の資料は、前述のとおり単純に子供の遊具として扱われるもの、将来の生業に関わる訓練用具、お守りという個々の機能を兼ね備えている。ワタリガラスの羽など北東アジア、北米諸民族の説話に登場する北方諸民族と自然界との関わりの中で育まれた精神世界を物語る資料の一つとして樺太アイヌとの関わりを示唆している資料もみられる。ちなみに、ワタリガラスは、イテリメンの「大地の創造」神話に登場し、イラクサで漁網を編むことを考え、チュクチの伝説では、セイウチ、アザラシ、北極グマ、クジラなどのすべての海の生き物と野生トナカイ、キツネ、クマなどのすべての陸の生き物を創造する主人公である。⁽¹²⁾

煙管、煙草入れなどの喫煙具には、植物素材としてタケ、クルミ、シナ、ホオノキ、動物素材としてトド、シカ、加工移入素材として木綿、金属素材として真鍮、銅、青銅、鉛、自然石素材として滑石、軽石などが使用されている。とりわけ樺太アイヌの喫煙具に関わる素材は、煙管雁首に滑石、煙草入れにトド、アザラシ等の海獣皮を多く使用する特性を示している。また、煙管のタケ製羅宇、真鍮製吸口は、互いに対をなしながら加工移入素材として他から入手使用したものである。

衣服、被りもの、履きもの、首飾り、耳飾りを含む服飾具は、植物素材にオヒョウ、シナ、イラクサ、スゲ、シラカバ、ヤナギ、ツルウメモドキ、ブドウズル、クルミ、マツ（トドマツ）、テンキグサ、フトイ、ガマ、動物素材にサケ、アザラシ、タイメニ（イトウ科）、トド、クマ、ジャコウジカ、テン、リス、コウモリ、イヌ、シカ、ウサギ、加工移入素材に木綿、絹、ビロード、縞子、更紗、メリンス、ネル、コールテン、フェルト、ガ

ラス、貨幣、金属素材に真鍮、鉛などを使用している。服飾具の場合、特に樹皮衣、草皮衣、魚皮衣、獣皮衣、木綿衣などのように衣服の素材に特定の動植物および加工移入等の素材を充てる事例が顕著に認められ、樹皮衣にオヒョウ、シナ、魚皮衣にサケ、獣皮衣にアザラシ、テンなどを主な素材としてあげることができる。特に樺太アイヌの樹皮衣の場合、オヒョウのみを使用している。また、樹皮衣、魚皮衣、獣皮衣の製作素材同様、カパミッ（白布切抜文衣）、ルウンペ（色布置文衣木綿衣）には、加工移入素材に木綿を主としながら部位に他素材のピロード、コールテン等を付加して製作されているものもみられ、衣服全般にわたり主素材を有しながら他素材を取り込んで部位の文様等を構成しているものが少なくない。さらに、衣服の製作時における縫合には、他の生活用具同様サハリン収集資料を中心としてそのほとんどの資料にイラクサ、ツルウメモドキの繊維糸が使用されている。

腰痛用帯、脇腹痛用紐、腹帯、胸紐、腕当など木綿布にヤナギ、ガラス玉等を付して病氣治癒、健康管理を祈願した護符的役割を有する樺太アイヌの服飾具も確認され、服飾にみる信仰、儀礼にまつわる樺太アイヌの精神世界の一端を伺わせる。

幣冠、鉢巻、頭巾、日覆いなどそのほとんどをピウスツキー、シェロシェフスキーのコレクションで占めている被りものは、植物素材にイラクサ、ブドウズル、オヒョウ、シナ、ヤナギ、ツルウメモドキ、ガマ、動物素材にクマ、ウミガモ、ジャコウジカ、リス、ワシ、加工移入素材に、絹、木綿、メリンス、ピロード、ガラスなどを使用している。ここでは、幣冠部位等に儀礼に関わるクマ爪、鹿角、ワシ嘴など動物遺存体をそのまま素材とした事

例がみられる。

生活用具の製作素材である加工材料は、イラクサ、スゲ、オヒョウ、シナ、テンキグサ、ツルウメモドキ、オニガヤ、マツ等の植物素材を主にホタテガイ、腱等若干の動物素材を含む。特にこれらの素材は、イラクサ、スゲ、オヒョウ、ツルウメモドキなど糸、紐、ロープ等材料に関わる生活必需品で需要の高い素材を束状に多数収集している。また、加工材料に深く関連しながら衣食住に関わるいくつかの動植物素材標本をも収集している。食用とするエゾノウワズミザクラ、ヤハズゴボウの茎、コムギ、オオウバユリ塊・澱粉、トド脂、服飾に関わるトドの柔皮、厚皮、シナ、カラフトマス皮、イトウ皮、狩猟に関わるトリカブト、住まいの照明に関わるニシン脂などがそれである。

このように個々の生活用具に関わる動植物、金属、加工移入等素材を観る限り、アイヌ民族は、北海道、サハリン、千島の動植物相を十分把握し、それに依存した生活形態を有していることがわかる。加えて、その生活形態を基盤としながらも民族接触により木綿、絹、ガラスなどの加工品を他地域、他民族からの移入というかたちで取り込んでいった傾向も伺える。また、今回の素材調査では、おおよそ生活用具の主たる素材を確認することができたが、それ以上に部位、要所の結束のための糸、紐など細部にわたる素材確認が具体的になされた結果、樺太アイヌの生活用具を主として植物素材であるイラクサが予想以上に使用されていることやサハリン、千島におけるトド、アザラシ、クジラ等の豊富な海獣動物の使用など各地域におけるアイヌの生活形態と素材依存度の相関関係に一定の方向性を見出すことができた。

<函館と在サントペテルブルグアイヌ資料>

今回の調査において、思いもかけず函館ゆかりの数点のアイヌ資料に遭遇することになった。それは、1871年(明治4年)12月7日、ニコライ司祭のロシア正教日本伝道布教補佐のために来函し、ニコライ上京後の翌年1月から1880年まで函館ハリストス正教会を司牧したアナトリー(本名: Aleksandr Dimitrievich Chikhai)⁽¹³⁾に由来するアイヌ資料である。

収集された資料は、イタ(盆)、アットゥシペラ(織篋)、イカヨッ(矢筒)、キセリトゥマム(煙管入れ)の4点であるが、資料台帳、資料記載によるといずれも「函館の修道司祭アナトリーから取得」したものであることが記録として残されている。これらの資料は、グリゴリーエフ収集資料としてコレクションナンバー345番、811番台が付され1879年MAΘに収蔵された資料である。

ところで、アナトリーからMAΘへの入手経緯に関する手がかりとして、これらの資料の入手元であるアナトリーに関わるこの頃の動向について言及してみる。アナトリーは、1860年日本における植物相研究のため函館来航を果たしたロシアの東亜植物の父カール・ジョハン・マキシモウィッチ、マキシモウィッチの植物採集指導を受けたハリストス正教会会員須川長之助とマキシモウィッチ帰国後の駿河台ニコライ堂における植物採集に大きく関与した人物でもある⁽¹⁴⁾。それは、明治17、18年頃からニコライ堂において植物学の師と仰ぐマキシモウィッチの依頼に応じて採集活動を行っていた長之助への指示監督と採集事務を取り扱い、日本各地の採集標本をアナトリー自らの手を経てニコライ堂からサントペテルブルグ植物園のマキシモウィッチの元へ送られていたのである。このような動向を考えると、アナトリーが関与したこれら

のアイヌ資料収集も函館在任期間中のそれに類似したグリゴリエフを介するサントペテルブルグへの入手経緯で捉えられる可能性を十分含んでいる。ちなみにアナトリーは、1890年4月30日ロシア本国に帰国し、1893年12月10日サントペテルブルグにて没している。

ところで、在サントペテルブルグMAI資料のおよそ8割を占めるピウスツキーコレクションは、北海道、樺太の両地域にわたって収集されているわけであるが、奇しくもそれから遅れること約30年後に函館出身である考古・民族学者馬場脩によって北海道、樺太、千島の調査が行われている。中でも樺太での調査、収集では、とりわけ樺太西海岸、東海岸地域における物質文化に焦点をあてたアイヌ文化究明を目的とするもので、後述する馬場の収集した樺太アイヌの生活用具479件にその大要を読みとることができる。馬場コレクションの核をなすこれら捧酒籠、喫煙具など日本を代表する樺太アイヌ資料の逸品を含む「アイヌの生活用具コレクション」750件は、1959年（昭和34年）国の重要民俗文化財に指定されている。⁽¹⁵⁾

ピウスツキーと馬場が、調査、収集時期を異にしながらも、互いの苦境の時代に追いやられたアイヌへの理解と接触によって膨大な数の収集資料と調査・研究成果を得ることができたことは言うまでもないが、これを裏付けるかのようにアイヌに関わるピウスツキー、馬場各々の貴重なエピソードが残されている。

1903年ピウスツキーは、ロシア科学アカデミーの命によりアイヌ民族調査のため函館に入港している。そのおり、函館で偶然一人のアイヌに出会う。白老に住むノムラ・シュハンラムという人物で、一人の和人から金儲け話を持ちかけられ、大阪の万国博覧会で熊送

りの実演を見せる契約で妻、隣人を引き連れて行ったが、雇い主は、報酬を一文も支払わずに逃げてしまい、着の身着のまま函館にたどり着き途方に暮れているところに遭遇し、弁当、切符などを買い与えた。ピウスツキーは、同年7月中旬に函館でポーランドの民族学者、作家であるヴァツワフ・シェロシェフスキーとの対面を果たし、二か月にわたる白老、ピラトリ調査に携わることになる。⁽¹⁶⁾特に白老では、ピウスツキーに救われたノムラ・シュハンラムと再会、止宿することとなり、今回の調査成果の一つとして確認された領収証などノムラ・シュハンラムゆかりの関係資料をも収集している。また、ノムラ・シュハンラム宅止宿の夕べでは、ピウスツキーが蓄音機で樺太アイヌの諺歌を披露している。⁽¹⁷⁾

それから12年後の1915年、京都に遊学中の若き馬場も当時のアイヌに対する社会的世相とはいえ、不思議にもピウスツキーと同様の体験をしている。それは、大正天皇の即位式ご大典を当て込んで熊送りのショーを実演するために日高地方ピラトリから20人ほどのアイヌが連れて来られたが客入りが思わしくないため興行師が夜逃げをしてしまい、途方に暮れていた状況にでくわした。さっそく着の身着のままの彼らに施しをし、無事北海道に帰還できるように取り計らっている。⁽¹⁸⁾

このようにみると、そこには不思議にも函館、アイヌ資料に関わる時空を越えたピウスツキーと馬場とのめぐり合いを感じずにはいられない。

なお、詳細を後述するとおりサハリンにおけるピウスツキーと馬場の資料収集地は、それぞれ地域を異にしており結果的にこの二つのコレクションが世界に現存する主要な樺太アイヌ資料をカバーしている。

＜日本における樺太アイヌ資料＞

今回の調査で、MAE所蔵アイヌ資料のおよそ8割を占めるピウスツキー収集資料は、これまでの未発見資料を含め多数の樺太アイヌ関係資料を有していることがわかった。これらの資料は、1903年の樺太西海岸マウカ（現ホルムスク）、1906年の東サハリンを中心に収集された北方諸民族との接触文化で育まれた樺太アイヌ固有の文化形態を明確に物語るものである。

日本における数少ない樺太アイヌ資料にあつて、とりわけ北海道におけるピウスツキー収集の樺太アイヌ資料と対比される資料は、旭川市博物館に150点、網走市立郷土博物館に133点、北海道開拓記念館に169点、市立函館博物館に479点の計931点⁽¹⁹⁾を数える。この中で、収集年代、収蔵点数等の資料内容が充実している函館博物館資料、旭川博物館資料の概要について言及し、ピウスツキー収集資料との相関関係を探ってみたい。

函館博物館の樺太アイヌ資料は、1935年から1941年にわたり北方民族学、考古学の権威馬場脩によって収集されたもので、樺太西海岸トウフツ、タランドマリ、東海岸タライカ、ニイトイ、シラハマ、オッチホの地域を収集地とし、その内西海岸タランドマリ収集資料241点が、全体の約半数を占めている。資料は、イクニシ（捧酒籠）を主としてイノカ、ニポポ、イナウ、幣冠、刀掛帯、太刀、太鼓、矢筒などの信仰・儀礼用具304点、弓矢、仕掛け弓、鉾、突き鉤、漁具、槍などの狩猟・漁撈用具50点、マキリ、錐、織り籠、網針、鉄砲玉鑄造具などの調整・加工用具35点、匙、しゃもじなどの炊事・調理用具、枕などの調度用具16点、太刀容器・鏝容器用ごさなどの収納具7点、イヌ呼び戻し、イヌの帽子などの運搬具5点、五弦琴などの楽器2点、煙草

入れ、煙管、火打入れなどの喫煙・発火具24点、首飾り、頸飾帯、耳飾り、帽子、カニクフ、帯などの服飾具35点、用途不明品1点がある。これらの資料の中でもとりわけ232点におよぶ膨大な資料数を占めるイクニシは、そこに付されたクマ、シャチなどの高彫り彫刻にみられるように信仰、儀礼に関わる樺太アイヌの精神文化をよく物語っているものとして知られる。ちなみに、馬場脩収集資料は、総体でおよそ2,000点あったとされるが、第二次世界大戦の東京大空襲でその過半数を消失しており、他に幾ばくかの樺太アイヌ資料が含まれていたかを考えると非常に惜しまれる。

一方旭川博物館所蔵の樺太アイヌ資料は、1943年に昆虫学、考古学、民族学者である河野広道によって収集されたもので、西海岸タランドマリ、ライチシ、東海岸オタス、タライカ、オッチホ、シラハマ、トンナイの地域におよんでいる。資料のバリエーションは、イナウ、イクニシ、イノカ、ニポポ、刀掛帯、太鼓などの信仰・儀礼用具61点、キテ、弓、テン取り器、掘り具などの狩猟・漁撈・採集用具5点、マキリ、潰し具、木皿、木盆、木椀、箸、匙、杓子、敷物などの炊事・調理・調度用具52点、白樺樹皮容器、鞆などの収納具6点、丸木舟模型、イヌの首輪などの運搬具2点、煙管、煙草入れなどの喫煙具6点、草皮衣、樹皮衣、獣皮衣、帽子、手袋、獣皮衣・魚皮靴、カニクフ、首飾り、頸飾帯、耳飾り、鉢巻きなどの服飾具18点がある。とりわけ自製の木製品である木皿、木盆、木椀などは、まとまった樺太アイヌの炊事・調理・調度に関わる資料として認めることができ、また、アザラシの毛皮で製作された樺太アイヌの獣皮衣や子供服は、日本に現存する稀少資料である。

国内におけるこの二つの博物館の樺太アイヌコレクションは、地理的に南樺太西海岸タラントマリ、トウフツ、ライチシの三地域、東海岸タライカ、オッチホ、シラハマ、トンナイ、ニイトイ、オタスの六地域から収集されたもので、これまで二館の資料内容が示すように、信仰、儀礼用具である圧倒的多数のイクニシ等を認める一方、魚皮衣、獣皮衣、被りものに代表される服飾具等の不足資料もあり、自然環境との関わりの中で多くの生活用具を産み出した材料、素材も皆無に近いのが実体である。上記に代表されるM A ㊦所蔵ピウスツキーコレクションの主たる収集地マウカ等の充実した新たな資料を加え、互いの資料を補う形でここに1903年から1947年にかけて南樺太の主要アイヌ居住地域における生活用具をおおむね集約することになった。

<結び>

このように日本における主要な樺太アイヌ資料を概観する限り、特定の収集地と収集資料内容の偏りによって生活様式の一断面を知るに留まり、これまで北方域の他民族との相対的な文化接触において物質文化からみた樺太アイヌの生活様式を十分に把握するには、相当の限界があったことも否めなかった。今回のピウスツキーコレクションに代表される確たる収集目的と資料への執着が示唆するM A ㊦資料の確認により、これらの在日本アイヌ資料を包括する中で樺太アイヌにおける物質文化の本質的核心に一層迫り、今後のアイヌ文化研究の基礎資料として新たな資料環境を見出した意義は大きい。とりわけ、在日本資料よりも少なくとも30年も遡る収集年代の確認とマウカ地方を中心とする樺太西海岸地域、東海岸地域における生活、文化の多様性を示すバリエーションに富んだ数多くの生活

用具の発見は、伝統的な樺太アイヌ文化の全容解明に一石を投じるとともに、北海道アイヌと大陸文化との関係において重要な接点をなす樺太アイヌにおける生活様式の原風景をより身近かなものにした。

そして在サンクトペテルブルグM A ㊦所蔵資料の全アイヌ資料確認をはじめこれら調査研究の集積と成果が、国際的なアイヌ文化研究における新たな一歩として、今後ヨーロッパ、北米、日本等に散在するアイヌ資料の重要な一群の中に据えながら広く共有、活用されることを確信することは言うまでもない。⁽²²⁾

最後に、二カ年にわたる国際学術研究「在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」のM A ㊦調査および本論執筆にあたり関係機関、関係諸氏には、多大なるご指導、ご協力をいただき心から感謝申し上げます。

(市立函館博物館 学芸係長)

註

- (1) 小谷凱宣「欧米アイヌ・コレクションの比較研究プロジェクト」「欧米アイヌ・コレクションの比較研究」所収 名古屋大学大学院人間情報学研究所 1997年3月31日
- 古原敏弘「サンクトペテルスブルグのアイヌ資料調査」「アイヌ民族文化研究センターだより No.4」所収 道立アイヌ民族文化研究センター 1996年3月20日
- 長谷部一弘「在サンクトペテルスブルグのアイヌ民族資料」「地域史研究 はこだて 第23号」所収 函館市市史編さん室 1996年3月31日
- (2) MA3所蔵アイヌ資料の収集年については、そのほとんどが資料台帳に記載されている登録、収蔵年によるものであり、厳密には個々の収集年を収蔵年以前で把握するものである。
- (3) 加藤九祚「北東アジア民族学史の研究」恒文社 1986年3月20日
- 桧山真一「日本におけるレフ・シテルンベルグ博士」(上・下)「窓 98,100号」所収 ナウカ 1996年9月30日 1997年3月31日
- (4) 知里眞志保 山本利雄「樺太廳博物館報告 第5巻第1号」樺太廳博物館 1943年3月
- (5) 小谷凱宣他「在米アイヌ関係資料の民族学的研究 第3章北米の主要アイヌ・コレクション一覧」名古屋大学大学院人間情報学研究所 1994年12月20日
- ハンス・ディーター・オイルシュレーガー「ベルリン国立民族学博物館におけるアイヌ・コレクションについて」「アイヌの工芸」所収 東京国立博物館 1993年11月23日
- (6) 山本利雄「樺太廳博物館報告 第4巻第4号」樺太廳博物館 1942年3月
- (7) 素材、材質については、アイヌにおける生活素材の依存度と入手の見地から、大きく動植物、金属、加工移入品で捉え個々の対象素材を紹介した。また、この素材に関わる資料紹介については、素材不明等資料も多々あり、素材同定可能な一覧掲載分671点を対象とした。
- (8) ロシア連邦科学アカデミーMA3シベリア部門部長チューネル・ミハエルビッチ・タクサミの教授による。
- (9) 知里眞志保 山本利雄「樺太廳博物館報告 第5巻第1号」樺太廳博物館 1943年3月
- (10) 山本利雄「樺太廳博物館報告 第4巻第4号」樺太廳博物館 1942年3月
- (11) 「市立函館博物館藏品目録」1民族資料篇 市立函館博物館 1979年3月31日
- (12) 荻原眞子「東北アジアの神話・伝説」東方書店 1995年8月30日
- (13) 山川令子「日本キリスト教歴史大事典」教文館 1988年2月20日
- (14) 井上幸三「マクシモヴィッチと須川長之助」岩手植物の会 1996年6月10日
- 中村健之介「宣教師ニコライと明治日本」岩波書店 1996年8月21日

- (15) 国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第1篇～第5篇 市立函館博物館 1974年～1979年
- (16) ジョン・バチラー「我が記憶をたどりて」 文録社 1928年10月15日
- 川郷土博物館 1975年3月30日
- (22) 本論以外の総資料リスト等調査の詳細については、併せて「ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録」草風館 1998年3月を参照されたい。
- 吉上昭三「プロニスワフ・ピウスツキ、北海道以後」 「国立民族学博物館研究報告別冊5号」所収 国立民族学博物館 1987年3月31日
- (17) 飯島生「北海道紀行」 「博物学雑誌第4巻第40号」所収 大阪博物学会 1903年9月20日
- 長谷部一弘「ロシア、函館所蔵のアイヌ民族資料について」 「第2次大戦前のロシア極東と函館の経済・文化交流に関する研究」所収 北海道科学研究費助成報告 1992年度
- (18) 馬場脩「北方民族の旅」 毎日新聞 1974年
- 馬場脩「北方民族の旅」 北海道出版企画センター 1979年3月5日
- (19) 「アイヌ史 資料編2 民具等資料所蔵目録(1)」 社団法人北海道ウタリ協会 1988年3月31日
- (20) 長谷部一弘「馬場コレクション研究」 「市立函館博物館研究紀要 第2号」所収 市立函館博物館 1992年3月31日
- (21) 青柳信克「河野コレクションとその収集者」 「欧米アイヌ・コレクションの比較研究」所収 名古屋大学大学院人間情報学研究科 1997年3月31日
- 「市立旭川郷土博物館所蔵品目録」IV 市立旭

おもなMA3収蔵のアイヌ資料一覧(素材・収集地・収集者・収蔵年等)

No	コレクション番号	資料名	素材	収集地	収集者	収蔵年
【信仰・儀礼】						
1	345-25	キツネの頭骨	キツネ・ヤナギ	アムールor北海道	グリゴーリエフ	1897
2	656-45	イナウ	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
3	656-47	イナウ	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
4	656-49	イナウ模型	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
5	656-50	イナウ模型	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
6	656-51	火の神のイナウ	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
7	656-52	耳輪のついた火の神のイナウ	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
8	656-54	突起(男根)のあるイナウ	ヤナギ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
9	656-55	クマ送りのイナウ	ヤナギ・イラクサ・木綿	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
10	656-57	クマ送りの用具	クルミ	サハリン・アムール州	シュテルンベルグ	1902
11	700-56	雄叫びをあげる者のイナウ	ヤナギ・マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
12	700-57	海神のイナウ	サクラ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
13	700-58	家の裏に立てるイナウ	ヤナギ・マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
14	700-61	イナウ	ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
15	700-105	捧酒篋	エリマキ	サハリン	ビウスツキー	1903
16	700-105 a	捧酒篋	サビタ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
17	700-115	イナウ	ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
18	700-117	イナウ	ヤナギ	サハリン西岸	ビウスツキー	1903
19	700-169 a	トリの頭のイナウ	鳥頭骨	サハリン西岸	ビウスツキー	1903
20	700-172	床上に吊すイナウ	ヤナギ・木綿	サハリン西岸	ビウスツキー	1903
21	700-172 a	イナウ	ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
22	700-233	クマ送りの際のクマの耳飾り	ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
23	700-234	クマ送りの際のクマにかぶせる帽子	ヤナギ・木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
24	700-246 b	イナウ	ヤナギ・マツ・木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
25	700-266	護符(子供用)	木綿・ガラス	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
26	700-266 a	護符(子供用)	木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
27	700-310	クジラのイナウ	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
28	700-380	イナウ	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1903
29	700-447 a	イナウ	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
30	700-447 b	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
31	811-14	大きなイナウ	ヤナギ	北海道	グリゴーリエフ	1879
32	811-15	小さなイナウ	ヤナギ	北海道	グリゴーリエフ	1879
33	829-327 a	フィリアザラシ木偶	オンコ・ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
34	829-338	舟のイナウ	ジャコウジカ・木綿	東サハリン	ビウスツキー	1906
35	829-339	雄グマの帯	ヤナギ・木綿・フトイ or ガマ・イラクサ	東サハリン	ビウスツキー	1906
36	829-340	雌グマの帯	ヤナギ・木綿・フトイ or ガマ・イラクサ	サハリン東岸	ビウスツキー	1906
37	829-432	クマ送り用背負い紐	ヤナギ・木綿	東サハリン	ビウスツキー	1906
38	829-443 a	クジラのイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
39	829-443 b	クジラのイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
40	829-443 c	クジラのイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
41	829-444 a	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
42	829-444 b	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
43	829-444 c	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
44	829-445 a	ヤナギに好かれたシャマンの祖先のイナウ	ヤナギ・マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
45	829-445 b	ヤナギに好かれたシャマンの祖先のイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
46	829-446	太陽神のイナウ	ヤナギ・マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
47	829-448	火の神のイナウ	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
48	829-449 a (1-2)	イナウ	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
49	829-449 b	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
50	829-449 c	イナウ	ヤナギ	サハリン東岸	ビウスツキー	1906
51	829-449 d	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
52	829-450 a	陰茎を立たせるイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
53	829-450 b	陰茎を立たせるイナウ	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
54	829-450 c	陰茎を立たせるイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
55	829-450 d	陰茎を立たせるイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
56	829-454	イナウ	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
57	829-455 a	陰のうイナウ	マツ	東サハリン	ビウス・シェロ	1904
58	829-455 b	陰のうイナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウス・シェロ	1904
59	829-455 c	陰のうイナウ	マツ	東サハリン	ビウス・シェロ	1904
60	829-456 a	イナウ	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
61	829-456 b	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
62	829-456 c	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
63	829-457 a	沼の口のイナウ	マツ	サハリン	ビウスツキー	1906
64	829-457 b	イナウ	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
65	829-457 c	イナウ	マツ	サハリン	ビウスツキー	1906
66	829-459 a	イナウ	マツ・ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
67	829-459 b	イナウ	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
68	829-460 a	イナウ	マツ・ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
69	829-460 b	イナウ	マツ・ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
70	829-463/1	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
71	829-463/2	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
72	829-463/3	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
73	829-463/4	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
74	829-463/5	イナウ	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
75	829-486	小グマの背負子	ヤナギ	東サハリン	ビウスツキー	1906
76	829-537	アゴヒゲアザラシの木偶	エゾマツ	—	ビウスツキー	1906
77	839-39	護符	カニ爪	北海道	ビウス・シェロ	1904
78	839-54	護符	クマ爪	北海道	ビウス・シェロ	1904
79	839-73	オオカミの頭のイナウ	オオカミ雌・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904

80	839- 74 a /2	護符	アホウドリ頭骨・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
81	839- 75 a /2	護符	カメ頭骨・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
82	839- 80	護符	フクロウ頭骨・羽・皮・ヤナギ・イナウキケ	北海道	ビウス・シェロ	1904
83	839-107	イナウ	ヤナギ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
84	839-107 a	イナウ (棒)	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
85	839-109	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
86	839-111	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
87	839-114	護符	キツネ雌・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
88	839-115 a	墓標模型	ヤナギ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
89	839-115 b	墓標模型	ヤナギ・木綿・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
90	839-119	護符	クマ爪・陰茎・オヒョウ	北海道	ビウス・シェロ	1904
91	839-133	仏壇	マツ	北海道	ビウス・シェロ	1904
92	839-133 b	お札	移入品	北海道	ビウス・シェロ	1904
93	839-150	護符 (メカジキの眼)	ヒョウタン・クマ爪・オヒョウ	北海道	ビウス・シェロ	1904
94	839-155	海岸の草原を守る神のイナウ	ヤナギ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
95	839-157	川の神のイナウ	ヤナギ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
96	839-159	小さいヌサのイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
97	839-159	小さいヌサのイナウ	グルミ	北海道	ビウス・シェロ	1904
98	839-163/2	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
99	839-164/2	火の神へのイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
100	839-168	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
101	839-194	ヌサ模型	ヤナギ・マツ・ドスナラ?	北海道	ビウス・シェロ	1904
102	839-194	護符	ヒグマ雄・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
103	839-194 a	イナウ (棒)	サクラ・シナ・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
104	839-194 r	イナウ (棒)	ヤナギ・シナ・マツ	北海道	ビウス・シェロ	1904
105	839-212/4	狼場を守るイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
106	839-212/4	狼場を守るイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
107	839-212/4	狼場を守るイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
108	839-213/2	川の神へのイナウ(棒)	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
109	839-214	前庭を守る神のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
110	839-217	家の神のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
111	839-219	川のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
112	839-220	火の嬪神に燃やすイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
113	839-228	クマの神のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
114	839-228	クマの神のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
115	839-229	護符	ヤナギ・アホウドリ	北海道	ビウス・シェロ	1904
116	839-230 a	イナウ (棒)	ヤナギ・鐺	北海道	ビウス・シェロ	1904
117	839-230 a b	小さいヌサのイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
118	839-230 b	イナウ (棒)	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
119	839-230 r	イナウ (棒)	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
120	839-233	キツネのイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
121	839-234	窓の上に立つイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
122	839-237	海の舟に捧げるイナウ	ヤナギ・イラクサ	北海道	ビウス・シェロ	1904
123	839-238	ウサギの頭のイナウ	ウサギ頭骨・イラクサ	北海道	ビウス・シェロ	1904
124	839-239	トリカブトのイナウ	ヤナギ・オヒョウ・トリカブト根	北海道	ビウス・シェロ	1904
125	839-240	川の舟の神へのイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
126	839-253	カワウソのイナウ	ヤナギ・イラクサ	北海道	ビウス・シェロ	1904
127	839-254	小鳥のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
128	839-255	イナウ (棒)	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
129	839-267	鳥の神のイナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
130	839-269	シャマンの木模型	サルヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
131	839-269 a	シャマンの木模型	サルヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
132	839-270	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
133	839-275	イヌの頭のイナウ	イヌ・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
134	839-280 a	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
135	839-280 b	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
136	839-280 d	イナウ	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
137	839-280 e	イナウ	ヤナギ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904

【狩猟・漁撈・採集】

1	202- 95 /2	銃	鉄・ツルウメドモドキ・海獣皮	サハリン	スーブルネンコ	1890
2	202-100/3	矢	鉄・カラマツ・ワシ羽	サハリン	スーブルネンコ	1890
3	202-107/4	網	シナ	サハリン	スーブルネンコ	1890
4	209- 41	魚捕り針	マツ・鉄	東サハリン	スーブルネンコ	1891
5	209- 42 a b b	テン捕り用仕掛模型	オンコ・イラクサ・マツ・木綿	サハリン	スーブルネンコ	1891
6	209- 49/2	槍	移入品 鉄・銅・獣皮	サハリン	スーブルネンコ	1891
7	345- 4/2	矢	グルミ?・シラカバ皮・鳥羽・獣骨	沿海地方・北海道	グリゴリエフ	1897+
8	345- 4/2	矢	オンコ・クジラ・シラカバ・イラクサ	沿海地方・北海道	グリゴリエフ	1897+
9	700- 59	トド用銃	鉄・獣皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
10	700-116	棒	ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1904
11	700-147	サケ捕り鉤針	鉄・ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
12	700-171	釣針	木綿・鉄・クジラ?	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
13	700-270	銃と皮紐	鉄・イラクサ・トド皮	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
14	700-271	銃柄	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1904
15	700-283	釣糸を巻きつける板	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
16	700-315 a b b	仕掛弓	マツ・イラクサ・鉄	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
17	700-316	テン用農模型	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1903
18	809- 2	矢筒	アザラシ・クジラヒゲ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
19	809- 3/4	矢	クジラ骨・腱・マツ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
20	809- 4	弓	オンコ・腱	千島	ヴォズネセンスキー	1840
21	809- 6/2	仕掛弓	オンコ?・クジラヒゲ・腱	千島	ヴォズネセンスキー	1840
22	809- 7/1	自動弓部品	ヤナギ・テグス	千島	ヴォズネセンスキー	1840
23	809- 8/2	矢	マツ・鉄	千島	ヴォズネセンスキー	1840
24	809- 9	銅・矢頭	銅・鹿骨	千島	ヴォズネセンスキー	1840
25	809- d /6-7	矢柄	オンコ・腱	千島	ヴォズネセンスキー	1840
26	809- 7/4 k	矢	マツ・サクラ皮・腱・羽 (ワシ?)	千島	ヴォズネセンスキー	1840
27	809- 7/ж	自動弓矢筒	ホオノキ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
28	811- 3	弓	オンコ・シナ	北海道	グリゴリエフ	1879

29	811- 6	矢筒	サクラ皮	北海道	グリゴリーエフ	1879
30	811- 16	釣竿	シナ・鉄・石・チシマザサ	北海道	グリゴリーエフ	1879
31	811- 22/2	銃	真鍮・鹿角	北海道	グリゴリーエフ	1879
32	829-328	アザラシ頭たき槌	マツ	サハリン	ビウスツキー	1906
33	829-347	槍	移入品 鉄・木綿・ヤチダモorドスナラ	サハリン	ビウスツキー	1906
34	829-348 a b	釣針	マツ・木綿・鉄	東サハリン	ビウスツキー	1906
35	829-404	テン罟	ヤナギ・麻・ウマの毛	サハリン	ビウスツキー	1906
36	829-412	ニシン漁すくい網	マツ・木綿	東サハリン	ビウスツキー	1906
37	829-428	石鐘をつける丸太	マツ・アシ	東サハリン	ビウスツキー	1906
38	829-439	定置網	木綿・海獣皮・石	東サハリン	ビウスツキー	1906
39	829-493	弓	オンコ・ツルウメモドキ	サハリン	ビウスツキー	1906
40	829-512 b	アザラシ狩用おとり模型	マツ?	サハリン	ビウスツキー	1906
41	829-512 b	アザラシ狩用おとり槌模型	マツ	サハリン	ビウスツキー	1906
42	829-512 r	アザラシ用仕掛模型	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
43	829-513 b	アザラシ狩用棒模型	ヤナギ	サハリン	ビウスツキー	1906
44	829-514 b	銃模型	マツ・イラクサ・ヤナギor籐	サハリン	ビウスツキー	1906
45	839- 34 b	矢	タケ・腱・カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
46	839- 43	銃	オンコ	北海道	ビウス・シェロ	1904
47	839- 59	矢筒	サクラ皮・タケ・カヤ・サケ皮	北海道	ビウス・シェロ	1904
48	839- 59 b	矢	腱・カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
49	839- 59 r	矢	イラクサ・カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
50	839- 59 d	矢	イラクサ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
51	839- 59 c	矢	腱・鹿骨・カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
52	839-106	輪(浮子)	タケ・ワラ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
53	839-124	梁模型	サビタorヤナギ	サハリン	ビウス・シェロ	1904
54	839-143	釣針(釣糸付)	マツ・ヤナギ・鉄・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
55	839-144	弾入れ	ヒグマ毛皮・鉄・オヒョウ	北海道	ビウス・シェロ	1904
56	839-174	縄	シナ・ツルウメモドキ	北海道	ビウス・シェロ	1904
57	839-174 a	離頭銃	鹿角・真鍮・鉄	北海道	ビウス・シェロ	1904
58	839-186	網	イラクサ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
59	839-187	建網	オンコ・ツルウメモドキ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
60	839-209	鹿笛	クルミ・イラクサ	北海道	ビウス・シェロ	1904
61	839-211	罟	マツ・イラクサ・シナ・タケ	北海道	ビウス・シェロ	1904
62	839-227	なづち棒	ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
63	839-266 (a b b r d ж)	仕掛弓	ヤナギ・マツ・シラカバ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
64	1052- 40	根掘り棒	マツ	南サハリンシスカ	ボリャコフ	1880
65	2803- 55	小弓	ヤナギ・腱	サハリン	ビウスツキー	1914
66	4685- 3	鉤	鉄	サハリン	ダヴィドフ	1894-95

【調整・加工】

1	345- 6	糸巻	マツ・シナ	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	—
2	345- 12	マキリさや	キハダorミズキorヤナギ	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	1897+3
3	700- 30	糸巻棒(紡錘車)	マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
4	700- 81	カナシキ	マツ・鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
5	700- 82	鉄鉤	鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
6	700- 86	ヤットコ	鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700- 87	クジコバシ	鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
8	700- 88	タガネ	鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
9	700- 89	タガネ	鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
10	700- 90 a	カナツチ	鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
11	700- 93	フイゴ	マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
12	700- 94	フイゴの口木	マツ・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
13	700-107	さや	移入品 チョウザメ・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
14	700-108	マキリさや	クルミ?・アザラシ皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
15	700-122	糸巻台	マツ・オヒョウ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
16	700-123	糸巻板	マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
17	700-222/2	フイゴ	マツ・サケ皮・ニカワ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
18	700-241	雪掻き棒	クルミ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
19	700-282 a / b	皮なめし棒	エンジュ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
20	820- 5	マキリさや	イタヤ・鹿角	千島	—	
21	820- 6	マキリさや	クルミ・鹿角・サクラ皮・ニカワ	千島	クンストカメラ	
22	829-331 a b	摘具	クジラ骨	東サハリン	ビウスツキー	1906
23	829-341 a b	鐘	マツ・鉄	サハリン	ビウスツキー	1906
24	829-352	ものを薄く割る木	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
25	829-364	帯織機	マツ・イラクサ・ヤナギ・木綿・クルミ	東サハリン	ビウスツキー	1906
26	829-421	漬し具	エンジュorカツラ	東サハリン	ビウスツキー	1906
27	829-485	火おこしうちわ	ワシ羽	サハリン	ビウスツキー	1906
28	829-498	マキリ	シラカバ・テンキグサ・イラクサorツルウメモドキ・鉄	東サハリン	ビウスツキー	1906
29	829-498 a	マキリ	シラカバ・テンキグサ・イラクサorツルウメモドキ・鉄	東サハリン	ビウスツキー	1906
30	829-511 a b b	カワウソウ尻尾乾燥具	マツ	東サハリン	ビウスツキー	1906
31	829-523	ゴザ織機	マツ・ツルウメモドキ・シナ・ガマ・石	東サハリン	ビウスツキー	1906
32	839- 25 a	糸巻	クルミ	北海道敷生	ビウス・シェロ	1904
33	839- 25 b	糸巻	クルミ	北海道敷生	ビウス・シェロ	1904
34	839- 25 c	糸巻	クルミ	北海道敷生	ビウス・シェロ	1904
35	839- 25 d	糸巻	クルミ	北海道敷生	ビウス・シェロ	1904
36	839- 50 b	マキリ柄	クルミ?	北海道	ビウス・シェロ	1904
37	839- 61	帯織機	オヒョウ・ヤナギ・アシ・カツラ・ネマガリダケ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
38	839- 66 r	網針	エリマキ	北海道・サハリン	ビウス・シェロ	1903
39	839-138 a	マキリ	クルミ?・シナ・サクラ皮	北海道	ビウス・シェロ	1904
40	839-142	鳥口	クルミ・綿	北海道	ビウス・シェロ	1904

41	839-146	カミノリ	移入品 鉄・鍵	北海道	ビウス・シェロ	1904
42	839-169	箕	センノキ	北海道	ビウス・シェロ	1904
43	839-170	ゴザ編機	ガマ・シナ・ツルウメモドキ・石	北海道	ビウス・シェロ	1904
44	839-184	イラクサ布織機	イラクサ・ヤナギ・タケ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
45	839-226	クマ肉吊し鉤	ハシドイ?・ヤナギ	北海道	ビウス・シェロ	1904
46	3125- 1	帯織機	イラクサ・木綿・オヒョウ	サハリン	ビウスツキー	1925
47	3125- 10	糸巻	クルミ・イラクサ	サハリン	ビウスツキー	1903-05
48	4685- 1	マキリさや	マツ?	サハリン	ダヴィドフ	1894-95

【調理・調度】

1	345- 7	盆	カツラ	沿海地方・北海道・函館	グリゴリエフ	—
2	629- 1	椀	ホオノキ	シベリア極東	帝国ロシア地理学協会	1891
3	700- 13	椀	センノキ?	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
4	700-164	イヌ用給餌器	エゾマツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
5	700-243	ひしゃく	ヤナギ・シラカバ・サルヤナギ根	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
6	809- 21	椀	移入品	千島	ヴォズネセンスキー	1840
7	811- 19	手拭いかけ	クルミ	北海道	グリゴリエフ	1879
8	829-419	調理盆	クルミ	サハリン	ビウスツキー	1906
9	829-420	調理盆	クルミ	東サハリン	ビウスツキー	1906
10	829-482	クマ用膳	センノキ	東サハリン	ビウスツキー	1906
11	829-526	杯	移入品	サハリン	ビウスツキー	1906
12	829-527	行器	移入品	サハリン	ビウスツキー	1906
13	839- 62	椀	サクラ樹皮	北海道	ビウス・シェロ	1904
14	839- 68 a	皿	カツラ	北海道	ビウス・シェロ	1904
15	839- 68 b	皿	カツラ	北海道	ビウス・シェロ	1904
16	839-176	盆	シラカバ	北海道	ビウス・シェロ	1904
17	839-185	杯	移入品	北海道	ビウス・シェロ	1904
18	839-196	盆	カツラ	北海道	ビウス・シェロ	1904
19	839-203	耳だらい	移入品	北海道	ビウス・シェロ	1904
20	839-206	膳	移入品	北海道	ビウス・シェロ	1904
21	839-272	クマ給餌器	センノキ	北海道	ビウス・シェロ	1904

【収納】

1	209- 26	収納袋	テンキグサ・イラクサ	サハリン	スーブルネンコ	1891
2	700- 19	箸入れ容器	クルミ?	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
3	700- 22/2	手提げ容器	シラカバ皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
4	700- 22/2	手提げ容器	シラカバ皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
5	700- 28	脂入れ容器	アザラシ胃袋	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
6	700- 29	脂入れ容器	アザラシ胃袋	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700-133	火打石入れ	トド皮・石	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
8	700-135	巾着	ピロード・絹	サハリン西岸	ビウスツキー	1903
9	700-138	砥石入れ袋	トド皮・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
10	700-138 a	巾着	フイリアザラシ皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
11	700-154	脂入れ容器	トド胃袋	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
12	700-242	容器	シラカバ・ヤナギ・サルヤナギ根	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
13	700-260	煙草入れ	魚皮・木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
14	700-323	容器	シラカバ皮	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
15	809- 12	編みかご	テンキグサ・木綿	千島	ヴォズネセンスキー	1840
16	809- 13	編みかご	テンキグサ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
17	809- 15	収納袋	テンキグサ・アザラシ皮・クジラヒゲ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
18	829-367	袋	テンキグサ・イラクサ・木綿	東サハリン	ビウスツキー	1906
19	829-423	袋	アシ・イラクサ	東サハリン	ビウスツキー	1906
20	829-489/6	箱容器	モミ樹皮・サルヤナギ根	東サハリン	ビウスツキー	1906
21	829-502	収納袋	イラクサ・マス皮	サハリン	ビウスツキー	1906
22	829-516	収納袋	イラクサ・マス皮	サハリン	ビウスツキー	1906
23	839- 15	袋	オヒョウ	北海道	ビウス・シェロ	1904
24	839- 19	袋	ガマ・シナ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
25	839- 44	魚用袋	シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
26	839- 67	網針・ハサミ入れケース	ホオノキ・イラクサ・鹿角・ニカワ・木綿(ハサミ付)	北海道	ビウス・シェロ	1904
27	839-121	袋	ガマ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
28	839-197	収納袋	オヒョウ	北海道	ビウス・シェロ	1904
29	839-201	火打石用袋	木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
30	839-202	収納袋	シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
31	839-258	火打石用袋	木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
32	839-276	袋	アザラシ	サハリン	ビウス・シェロ	1904
33	3125- 6	煙草入れ	ガマ・木綿・ツルウメモドキ	サハリン	ビウスツキー	1903-05

【住まい】

1	202- 18	家模型	マツ・シラカバ・木綿	サハリン	スーブルネンコ	1890
2	700- 71	ゴザ	ガマ・イラクサ・シナ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
3	700-106	灰ならし	マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
4	700-129	枕	ナラ・鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
5	700-165	イヌつなぎ棒	ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
6	700-217	魚干し棚模型	マツ・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700-230	狩小屋模型	マツ・ヤナギ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
8	700-231	狩小屋模型	カヤ・ヤナギ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
9	700-232	クマ檻模型	マツ?・木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
10	700-274	魚干し棚模型	マツ	サハリン	ビウスツキー	1903
11	700-277	家模型	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
12	700-284	ゴザ	ガマ・シナ・イラクサ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
13	820- 10	敷物	ガマ・イラクサ	千島	クンストカメラ	—
14	829- 4/8	たいまつ	マツ・シラカバ	サハリン	ビウスツキー	1906
15	829-429	納屋模型	マツ・シラカバ	東サハリン	ビウスツキー	1906

16	829-468	ゴザ	テンキグサ・オヒョウ・イラクサ	東サハリン	ビウスツキー	1906
17	829-469	ゴザ	ガマ・スゲ・イラクサ・木綿・シナ	東サハリン	ビウスツキー	1906
18	829-509	炉ぶち	マツ	サハリン	ビウスツキー	1906
19	829-539	ゴザ	テンキグサ・オヒョウ・イラクサ	サハリン	ビウスツキー	1906
20	839-71	ゴザ	ガマ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
21	839-77	ゴザ	ガマ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
22	839-91	女性用枕	ガマ・シナ・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
23	839-92	男性用枕	シナ・ガマ	北海道	ビウス・シェロ	1904
24	839-93	男性用寝ゴザ	ガマ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
25	839-94	女性用寝ゴザ	ガマ・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
26	839-175	簾	ヤナギ・ブドウツル	北海道	ビウス・シェロ	1904
27	839-182	家模型	カヤ・マツ	北海道	ビウス・シェロ	1904

【運搬・補助】

1	202-29/2	イヌゾリ用制御棒	シラカバ・鉄	サハリン	スーブルネンコ	1890
2	202-29/2	イヌゾリ用制御棒	シラカバ・鉄	サハリン	スーブルネンコ	1890
3	202-30/3	イヌつなぎ首輪	アザラシ皮・鉄	サハリン	スーブルネンコ	1890
4	202-30/3	首輪紐	アザラシ皮・鹿角	サハリン	スーブルネンコ	1890
5	202-31/4	ソリイヌ用頭飾り	アザラシ皮・毛皮・木綿	サハリン	スーブルネンコ	1890
6	202-31/4	ソリイヌ用頭飾り	アザラシ皮・木綿・ウマの毛	サハリン	スーブルネンコ	1890
7	202-31/4	ソリイヌ用頭飾り	アザラシ皮・木綿・真鍮・ウマの毛	サハリン	スーブルネンコ	1890
8	202-31/4	ソリイヌ用頭飾り	アザラシ皮・木綿・ウマの毛	サハリン	スーブルネンコ	1890
9	209-22/3	丸木舟模型	マツ	サハリン	スーブルネンコ	1891
10	209-22/3	丸木舟模型	マツ	サハリン	スーブルネンコ	1891
11	209-22/3	丸木舟模型	マツ	サハリン	スーブルネンコ	1891
12	209-48	スキーストック	マツ・クジラヒゲ・ブドウツル・イラクサ・アザラシ?	サハリン	スーブルネンコ	1891
13	345-14/2	背負い紐	シナ	北海道	グリゴリーエフ	1897+
14	345-19 a b	かんじき	クワ・獣皮	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	1897+
15	700-5	杖	マツ?	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
16	700-125/2	船模型	クルミ・マツ・シナ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
17	700-157	クマ用首輪	イヌ皮・鉄	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
18	733-10	ソリ模型	ヤナギ・シナ・オヒョウ	ヤクートビリュイ州・ザバイカル地方・サハリン	マークカストレン他	-
19	809-10	船模型	マツ・クジラヒゲ・木綿	千島	ヴォズネセンスキー	1840
20	809-14	板綴船模型	クルミ・マツ・シラカバ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
21	809-22	板綴船模型	マツ・クジラヒゲ	千島	ヴォズネセンスキー	1840
22	829-426	スキーストック	マツ	サハリン	ビウスツキー	1906
23	829-496	ソリ用スキー	トド皮・アザラシ皮・木綿	サハリン	ビウスツキー	1906
24	829-501	背負い紐	ツルウメモドキ・木綿	東サハリン	ビウスツキー	1906
25	829-506	クマ用首輪	マツ・テンキグサ・イラクサ・ツルウメモドキ	サハリン	ビウスツキー	1906
26	829-543	板綴船模型	マツ・カツラ	サハリン	ビウスツキー	1906
27	839-22 a	背負い紐	イラクサ?・木綿	北海道敷生	ビウス・シェロ	1904
28	839-22 b	背負い紐	シナ	北海道敷生	ビウス・シェロ	1904
29	839-46	かんじき	マツ?・イラクサ・シナ	北海道	ビウスツキー	1904
30	839-47	かんじき	イヌ皮・シナ	北海道	ビウス・シェロ	1904
31	839-183	板綴船模型	マツ・サクラ皮・ヤナギ・イラクサ	北海道	ビウス・シェロ	1904

【楽器】

1	700-25	太鼓	トナカイ皮?・網・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
2	700-27/2	口琴	タケ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903

【遊戯】

1	700-63	羽	ワタリガラス	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
2	700-145/3	竹鉄砲	タケ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
3	700-145/3	竹鉄砲	タケ・獣皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
4	700-146/2	矢	マツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
5	700-153	玩具	マツ・シナ・針金・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
6	700-201	杖	イチイ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700-257	皿	クルミ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
8	700-257 a	矢	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
9	700-257 a	弓	ヤナギ・ツルウメモドキ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
10	700-257 b	銃	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
11	700-257 b	矢or槍	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
12	700-257 c	匙	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
13	700-257 d	マキリ	クルミ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
14	700-257 e	スキー	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
15	700-257 z	木槌	クルミ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
16	700-257 n	銃	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
17	700-257 n	短剣	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
18	700-257 m	サケ用釣	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
19	700-257 n	濃し具	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
20	700-279 a / 279 / b	方位ゲーム	マツ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
21	700-307	子供用弓	ヤナギ・ツルウメモドキ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
22	700-307	子供用矢	ヤナギ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
23	829-398	玩具用ソリ	マツ・イラクサ	サハリン	ビウスツキー	1906
24	829-407	ゲーム用棒	マツ・イラクサ・木綿	東サハリン	ビウスツキー	1906
25	839-101 a	子供用矢	カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
26	839-101 b	子供用矢	カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
27	839-101 b	子供用矢	カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904
28	839-101 b	子供用矢	カヤ	北海道	ビウス・シェロ	1904

【喫煙】

1	178-6/2 a b	煙管	タケ・真鍮	アムール	シュレンク	1888
2	202-79 a	煙管	タケ・真鍮	サハリン	スーブルネンコ	1890

3	202- 79 b	煙管	タケ・真鍮	サハリン	スーブルネンコ	1890
4	202- 80 a	煙管	滑石・真鍮	サハリン	スーブルネンコ	1890
5	202- 80 b	煙管	滑石・真鍮	サハリン	スーブルネンコ	1890
6	700-126	灰皿	石	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700-132	煙草入れ	トド皮・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
8	700-132 a	煙草入れ	トド皮・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
9	700-223 a	煙管	滑石・真鍮・タケ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
10	700-223 b	煙管	滑石・真鍮・タケ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
11	700-223 c	煙管	滑石・真鍮・タケ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
12	810- 1	煙管	鉛	千島	海軍省	1826
13	829-520	煙管入れ	クルミ	東サハリン	ビウスツキー	1906
14	839-151	灰皿	軽石	北海道	ビウス・シェロ	1904
15	839-180	喫煙具	シナ・鹿角	北海道	ビウス・シェロ	1904
16	1052- 44	煙管入れ	ホオノキ	南サハリンシスカ	ポリャコフ	1880
17	1052- 45	煙管	シラカバ根(サビタ?)	南サハリンシスカ	ポリャコフ	1880
18	1052- 50	煙管	タケ・銅	南サハリンシスカ	ポリャコフ	1880
19	1052- 58	煙管	中国製青銅	南サハリンシスカ	ポリャコフ	1880

【服飾】

1	202- 46	魚皮衣	サケ皮・アザラシ皮・タイメニ・木綿	サハリン	スーブルネンコ	1890
2	202- 49	樹皮衣	オヒョウ・木綿・絹・イラクサ	サハリン	スーブルネンコ	1890
3	202- 54 a	靴	アザラシ・トド皮・スゲ	サハリン	スーブルネンコ	1890
4	202- 65 a b	袖口止め	ピロード・木綿	サハリン	スーブルネンコ	1890
5	202- 86	帯	イラクサ・オヒョウ	サハリン	スーブルネンコ	1890
6	202- 87	帯	木綿	サハリン	スーブルネンコ	1890
7	345- 13	頸飾帯	ラシャ・木綿	沿海州・北海道	グリゴリーエフ	1897
8	345- 16	靴	サケ・シナ・腱	北海道	グリゴリーエフ	1897+
9	345- 23	真田紐	オヒョウ・木綿	北海道	グリゴリーエフ	1897+
10	345- 24/3	前掛け	オヒョウ・木綿	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	1897+
11	345- 24/3	前掛け	オヒョウ・木綿	北海道	グリゴリーエフ	1897+
12	345- 26/2	頭布	木綿	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	1897+
13	345- 28	樹皮衣	オヒョウ・イラクサ・木綿	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	—
14	345- 30	小袖	木綿	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	1897+
15	345- 58/3	幣冠	クマ爪・皮	沿海地方	グリゴリーエフ	1897+
16	345- 60	鉢巻	木綿・オヒョウ	沿海地方・北海道	グリゴリーエフ	1897+
17	482- 2	樹皮衣	オヒョウ・木綿	サハリン	ボシエット	1899
18	482- 3	前掛け	オヒョウ・木綿	—	ボシエット	1899
19	656- 59	織物見本	イラクサ	サハリン・アムール	シュテルンベルグ	1902
20	700- 4/ a	魚皮衣	サケ皮・アザラシ皮・ガラス・フェルト・カワウソorテン・真鍮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
21	700- 7	帽子	ウミカモ?・イラクサ・オヒョウ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
22	700- 16	櫛	クルミ	サハリン西岸セト口	ビウスツキー	1903
23	700- 35	耳覆い	アザラシ皮・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
24	700- 39	帽子(冬用)	木綿・ジャコウジカ毛皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
25	700- 45/2	子供靴	アザラシ皮・イラクサ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
26	700- 47	前掛け	木綿・絹	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
27	700- 48	スカート	サケ皮・木綿・腱	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
28	700- 50 a	広帯	木綿・イラクサ・ガラス	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
29	700- 51 b	帯	イラクサ・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
30	700-121	帽子	シラカバ・ヤナギ・木綿	サハリン	ビウスツキー	1903
31	700-137/4	刺しゅう見本	木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
32	700-137/5	刺しゅう布	ピロード・木綿・イラクサ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
33	700-137/5	刺しゅう布	木綿・イラクサ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
34	700-137/5	刺しゅう布	木綿・イラクサ・ピロード	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
35	700-137 a/4	刺しゅう見本	木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
36	700-137 a/4	刺しゅう見本	木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
37	700-158	股引	イヌ皮・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
38	700-162	獣皮衣	アザラシ皮・テン皮・木綿・絹・綿子・ツルメモドキ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
39	700-181 a	被りもの	ブドウツル・ガラス・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
40	700-184	幣冠	フトイorスゲ・ガラス・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
41	700-185	被りもの	フトイorスゲ・ブドウツル・木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
42	700-186	被りもの	ガマorスゲ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
43	700-187	被りもの	オヒョウ・シナ・木綿・ジャコウジカ皮	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
44	700-188	被りもの	木綿	サハリン西岸	ビウスツキー	1903
45	700-189	被りもの	リス・木綿・ガラス	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
46	700-190	被りもの	ピロード・木綿・コウモリ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
47	700-193	頸飾帯	木綿・ヤナギ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
48	700-194	頸飾帯	木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
49	700-195	腹帯	木綿・ヤナギ・ガラス・絹	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
50	700-196	腰痛用帯	木綿・クルミ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
51	700-197	脇腹痛用紐(治療用)	木綿・ヤナギ・トドマツ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
52	700-215/2	男性用皮靴(冬用)	アザラシ	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
53	700-224	スカート	ゴマフアザラシ皮・サケ皮・絹	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
54	700-227 a	下帯(チャハチャンキ)	木綿・絹・毛皮	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
55	700-228 b	おしめ	木綿	サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
56	700-229	おしめ	絹・木綿・ツルメモドキ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
57	700-235	襷	イラクサ・木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
58	700-249	胸紐(女性用)	木綿・ヤナギ	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
59	700-250	胸紐(男性用)	木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
60	700-251	腹帯	木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
61	700-252	日覆い	木綿・ガラス	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
62	700-254	帽子	木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
63	700-254 a	幣冠	テンキグサ・木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
64	700-255	足紐	木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903
65	700-258	袖	木綿	サハリン東岸	ビウスツキー	1903

66	700-262	幣冠	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
67	700-264	靴(子供用)	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
68	700-286	帽子(子供用)	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
69	700-287	胸紐	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
70	700-288	頸飾帯	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
71	700-289	腕環(子供用)	木綿・ガラス	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
72	700-290	文様布	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
73	700-291	おしめカバー	オビヨウ・木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
74	700-292	帽子(女性用)	木綿・ガラス	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
75	700-295	鉢巻(手拭い)	木綿	サハリン西岸	ピウスツキー	1903
76	700-297	股引(子供用)	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
77	700-298/2	手甲	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
78	700-299/2	股引(男性用)	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
79	700-300	襷	オビヨウ・木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
80	700-301	下帯	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
81	700-308	頸飾帯	木綿	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
82	700-319	脚絆	木綿	サハリン西岸マウカ	ピウスツキー	1903
83	700-320	腕環	木綿・ガラス	サハリン東岸	ピウスツキー	1903
84	700-321	鉢巻(女性用)	ビロード・ガラス・木綿	サハリン西岸マウカ	ピウスツキー	1903
85	700-322	手甲	木綿	サハリン西岸マウカ	ピウスツキー	1903
86	700-326/2	手甲	木綿・絹	サハリン	ピウスツキー	1903
87	810-4	樹皮衣	オビヨウ・イラクサ・木綿	千島	海軍省	1826
88	820-4	刀掛帯	ツルウメモドキ・木綿・絹・ヤナギ	千島	クンストカメラ	-
89	829-329	帽子	ヤナギ・イラクサ	サハリン	ピウスツキー	1906
90	829-330	子供服	イヌ・クマ・木綿・縲子・絹・ガラス	サハリン	ピウスツキー	1906
91	829-354	衣服(子供用)	木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
92	829-356	衣服(女児用)	木綿・ガラス	東サハリン	ピウスツキー	1906
93	829-357	股引(女性用)	木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
94	829-358	脚絆	木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
95	829-359	チャンチャンコ	木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
96	829-362	刀掛帯	木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
97	829-366	帯	テンキグサ	東サハリン	ピウスツキー	1906
98	829-368	手袋(男性用)	デン・イヌ・フィリアザラシ	東サハリン	ピウスツキー	1906
99	829-370	帽子	ウミガモ?・木綿・テン毛皮	東サハリン	ピウスツキー	1906
100	829-372	帯	イラクサ・ガラス	東サハリン	ピウスツキー	1906
101	829-373 a	幣冠	絹・木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
102	829-373 b	幣冠	絹・木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
103	829-374	頸飾帯	絹・木綿	サハリン	ピウスツキー	1906
104	829-375	帯(子供用)	木綿・ガラス	東サハリン	ピウスツキー	1906
105	829-378 a	帯	イラクサ・木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
106	829-378 b	帯	イラクサ・木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
107	829-379	樹皮衣	木綿・イラクサ	東サハリン	ピウスツキー	1906
108	829-380	衣服	イラクサ・木綿	サハリン	ピウスツキー	1906
109	829-381	脚絆	鹿毛orイヌ・木綿	サハリン	ピウスツキー	1906
110	829-384	紐	イラクサ	サハリン	ピウスツキー	1906
111	829-387	前掛け	木綿・絹	サハリン	ピウスツキー	1906
112	829-391	靴	アザラシ・木綿	サハリン	ピウスツキー	1906
113	829-392	魚皮衣	魚皮(サケ?)・絹・木綿・真鍮・鉛	サハリン	ピウスツキー	1906
114	829-406	刀掛帯	木綿・イラクサ・サケ皮	東サハリン	ピウスツキー	1906
115	829-417	靴	魚皮(チラシキ)	サハリン	ピウスツキー	1906
116	829-477	帯(女性用)	木綿・絹・イラクサ	サハリン	ピウスツキー	1906
117	829-478	帯	フトイ・木綿・魚皮	東サハリン	ピウスツキー	1906
118	829-483	帽子	魚皮・木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
119	829-528	ボタン	コハク・ガラス	東サハリン	ピウスツキー	1906
120	829-538	少女習作刺しゅう布	木綿	東サハリン	ピウスツキー	1906
121	829-542	幣冠	ヤナギ・絹・木綿	サハリン	ピウスツキー	1906
122	837-179	垂け飾り	木綿・[寛永通宝]	北海道	ピウス・シェロ	1904
123	839-17	樹皮衣	オビヨウ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
124	839-26 a	幣冠	ブドウツル・シナ・ヤナギ・クマ爪	北海道	ピウス・シェロ	1904
125	839-27	幣冠	ツルウメモドキ・木綿・シナ・ヤナギ・ブドウツル	北海道	ピウス・シェロ	1904
126	839-28 a	幣冠	ヤナギ・絹・木綿・ブドウツル	北海道	ピウス・シェロ	1904
127	839-33	帽子	木綿・オビヨウ	北海道	ピウス・シェロ	1904
128	839-38 a	前掛け(男性用)	オビヨウ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
129	839-38 b	前掛け(男性用)	木綿・絹	北海道	ピウス・シェロ	1904
130	839-41	耳飾り	真鍮・鉛	北海道	ピウス・シェロ	1904
131	839-47	かんじき用靴	鹿皮?	北海道	ピウス・シェロ	1904
132	839-48	脚絆	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
133	839-51	帯(女性用)	オビヨウ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
134	839-52	幣冠	ワシ嘴・ガマ・メリンス・ヤナギ・イラクサ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
135	839-53	幣冠	木綿・イラクサ・絹・ブドウツル・ヤナギ	北海道	ピウス・シェロ	1904
136	839-55	頭巾	木綿・ブドウツル	北海道	ピウス・シェロ	1904
137	839-65	帯(若者用)	オビヨウ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
138	839-69	(首)飾り	鉛・イラクサ	北海道	ピウス・シェロ	1904
139	839-76	首飾り	ガラス・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
140	839-79	耳飾り	真鍮	北海道	ピウス・シェロ	1904
141	839-82/2	脚絆	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
142	839-82 a	脚絆	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
143	839-83/2	モンペ	ネル	北海道	ピウス・シェロ	1904
144	839-84	襷	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
145	839-86	樹皮衣	オビヨウ・イラクサ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
146	839-87 a	色布置文衣	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
147	839-88	男性用鉢巻	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
148	839-89	襷	オビヨウ・木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
149	839-95	脚絆	木綿	北海道	ピウス・シェロ	1904
150	839-96/2	手甲	木綿・イラクサ	北海道	ピウス・シェロ	1904
151	839-97	ワラジ	スゲ・ブドウツル	サハリン	ピウス・シェロ	1904

長谷部 一弘：在サントペテルブルグアイヌ資料の研究

152	839-98	履きもの	ブドウツル・木綿	北海道	ビウス・シェロ	1904
153	839-100	色布置文衣	木綿・オヒョウorツルウメモドキ	北海道	ビウス・シェロ	1904
154	839-122	帽子	シラカバ・シナ・ブドウツル	北海道	ビウス・シェロ	1904
155	839-127	胸飾り	マツ	北海道	ビウス・シェロ	1904
156	839-129	脚絆	ガマ・シナ・木綿	北海道	ビウスツキー	1904
157	839-195	白布切抜文衣	木綿・コールテン	北海道	ビウスツキー	1904
158	839-199	色布置文衣	木綿・ピロード	北海道	ビウスツキー	1904
159	839-225 a	頸飾帯	ピロード・真鍮	北海道	ビウスツキー	1904
160	839-263/3	帯	イラクサ・木綿	北海道	ビウスツキー	1904
161	839-263/3	帯	オヒョウ・木綿	北海道	ビウスツキー	1904
162	839-265	上衣	木綿・メリンス	北海道	ビウスツキー	1904
163	839-282	幣冠	ヤナギ・鹿角	沿海地方	ビウス・シェロ	1904
164	1052-181	布切れ	絹	サハリン	ポリャコフ	1880
165	1052-183	布切れ	絹	サハリン	ポリャコフ	1880
166	1052-184	布切れ	絹	サハリン	ポリャコフ	1880
167	1052-185	布切れ	絹	サハリン	ポリャコフ	1880
168	2803-33/2	腕当て(治療用)	木綿・ガラス	サハリン	ビウスツキー	1914
169	2803-51	喉当て	更紗・ウサギ	南サハリンタライカ湾	ビウスツキー	1914
170	3125-3	幣冠	木綿・ヤナギ・ガラス	サハリン	ビウスツキー	1903-05
171	3125-4	帯	木綿	サハリン	ビウスツキー	1903-05
172	3125-7/2	耳飾り	真鍮	サハリン	ビウスツキー	1903-05
173	3125-8	布	木綿・絹・ツルウメモドキ	サハリン	ビウスツキー	1924+
174	3125-9	刺しゅう布	木綿・絹	サハリン	ビウスツキー	1903-05
175	3125-11	帯	オヒョウ	サハリン	ビウスツキー	1903-05
176	4375-1	魚皮衣	サケ皮・アザラシ皮・木綿・ガラス	—	—	—

【絵画・習字】

1	811-23	アイヌ絵	絹地	北海道	グリゴリエフ	1879
2	811-24	アイヌ絵	絹地	北海道	グリゴリエフ	1879
3	811-26	アイヌ絵	絹地	北海道	グリゴリエフ	1879
4	811-27	アイヌ絵	絹地	北海道	グリゴリエフ	1879
5	811-28	アイヌ絵	絹地	北海道	グリゴリエフ	1879
6	839-103/3	習字	雁皮紙・コウソウ紙	北海道	ビウス・シェロ	1904
7	839-118/4	領収書	紙	北海道	ビウス・シェロ	1904

【加工材料】

1	202-25	イラクサ(束)		サハリン	スーブルネンコ	1890
2	209-31	スゲ(束)		サハリン	スーブルネンコ	1891*
3	209-33/3	イラクサ(束)		サハリン	スーブルネンコ	1891*
4	345-22	オヒョウ(糸玉)		沿海地方・北海道	グリゴリエフ	1897+
5	700-33 a	ホタテガイ(燈油の器用)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
6	700-72/3	テンキグサ(束)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700-273/2	マツ		サハリン東岸	ビウスツキー	1903
8	700-276	マツ		サハリン東岸	ビウスツキー	1903
9	829-369 a	腱(トンコリ弦用)		東サハリン	ビウスツキー	1906
10	829-431	ブドウツル(束)		サハリン東岸	ビウスツキー	1906
11	829-500	ツルウメモドキ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
12	829-500/3	ツルウメモドキ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
13	829-500/a	イラクサ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
14	829-500/b	ツルウメモドキ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
15	829-500/b	イラクサorツルウメモドキ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
16	829-500/e	ツルウメモドキ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
17	829-500 f	イラクサ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
18	829-500 r	イラクサ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
19	829-533	オヒョウ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
20	829-534	オヒョウ(束)		サハリン	ビウスツキー	1906
21	829-535	ホオノキ?		サハリン	ビウスツキー	1906
22	839-3	オヒョウ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
23	839-6	オヒョウ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
24	839-8	オヒョウ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
25	839-9	オヒョウ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
26	839-10	シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
27	839-11	シナ(糸玉)		北海道	ビウスツキー	1903
28	839-12	シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
29	839-13	シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
30	839-14	イラクサ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
31	839-18	イラクサ・シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
32	839-81	イラクサorツルウメモドキ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
33	839-192	シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
34	839-200	オヒョウ(糸玉)		北海道	ビウス・シェロ	1904
35	839-210	シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
36	839-215	オニガヤ・シナ(束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
37	3125-13	イラクサ(ロープ用)		サハリン	ビウスツキー	1925+

【動・植物標本】

1	209-37	エゾノウミズザクラの実(保存食用)		サハリン	スーブルネンコ	1891
2	345-18	シナ		沿海地方・北海道	グリゴリエフ	1897+
3	700-6	コンブ(束)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
4	700-67	トド陰茎		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
5	700-70	コンブの根		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
6	700-99/2	トド皮(柔)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
7	700-99/2	トド皮(柔)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
8	700-100	トド皮(厚)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
9	700-101	トド皮(毛付)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
10	700-127	ハナウド		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
11	700-128	ヤハズコボウの茎(食用)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
12	700-128 a	ヤハズアザミの葉		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903

13	700-178	ニシン脂 (灯明用)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
14	700-179	トド脂 (食用)		サハリン西岸マウカ	ビウスツキー	1903
15	700-304	オオハナウド?		東サハリン	ビウスツキー	1903
16	700-305	エゾマツの根		東サハリン	ビウスツキー	1903
17	700-391	オオウバユリ塊		サハリン	ビウスツキー	1903
18	829-414	サケorマス		東サハリン	ビウスツキー	1906
19	829-415/2	カラフトマス皮		東サハリン	ビウスツキー	1906
20	829-416	イトウ皮		サハリン	ビウスツキー	1906
21	829-471	ハンノキ皮		サハリン	ビウスツキー	1906
22	829-515/B	オオハナウド		サハリン	ビウスツキー	1906
23	829-515/e	エゾエンコザク		東サハリン	ビウスツキー	1906
24	829-515/a	オオウバユリ澱粉 (団子用)		—	ビウスツキー	1906
25	829-519	マツ根 (束)		サハリン	ビウスツキー	1906
26	837- 1	ホッキガイ		サハリン	ビウスツキー	1904
27	837- 6	ホタテガイ		サハリン	ビウスツキー	1904
28	837- 14	カイメン		サハリン	ビウスツキー	1904
29	837- 16	クルミ殻		サハリン	ビウスツキー	1904
30	839- 5/2	ハンノキ		北海道	ビウス・シェロ	1904
31	839- 40/3-3	カジキマグロの尾・背骨		北海道	ビウス・シェロ	1904
32	839-189	コムギ		北海道	ビウス・シェロ	1904
33	839-190	トリカブト		北海道	ビウス・シェロ	1904
34	839-281	オオウバユリのリンケイ		北海道	ビウス・シェロ	1904
35	839-286	ガマ・スゲ		北海道	ビウス・シェロ	1904
36	839-287	スゲ (束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
37	839-288	ガマ (束)		北海道	ビウス・シェロ	1904
38	2803- 13/B	カワシンジュガイ		サハリン	ビウスツキー	1914
39	2803- 31	エゾエンコザク		サハリン	ビウスツキー	1914

註1：収集欄のビウスはビウスツキー、シェロはシェロシェフスキー

註2：収蔵年の*は収集、+は登録

註3：収集地の「北海道」の原表記は「Eco」(エゾ)

<SPb AINU PROJECT>調査票

SPb AINU PROJECT

Sheet of information on Ainu Ethnographic Material

Museum / No : MAE / GME : 700-233

Name of Specimen : Наушники для удивляемого на празднике медведя
クマ祭り = 熊送り / 木綿 / 赤木綿 / 熊の耳飾り

Ainu name : ウシプンノ ヲノノニユ (クマ祭り「熊送りの際の熊の耳飾り」)

Original Collector : Б.О. Пилсудский ヒルヌーヰキ

Where collected? : Зап. Берег Сахалина, село Мауко
サハリン西岸 マウコ村

When collected? : Февраль 1903 (пост. в музей) 1903 2月 (SK)

Registrar : А.И. Штерндберг, март 1903 (SK) フォトルンペルグ

Size: Length: _____ cm: Width: _____ cm: Height: _____ cm:

Other Information

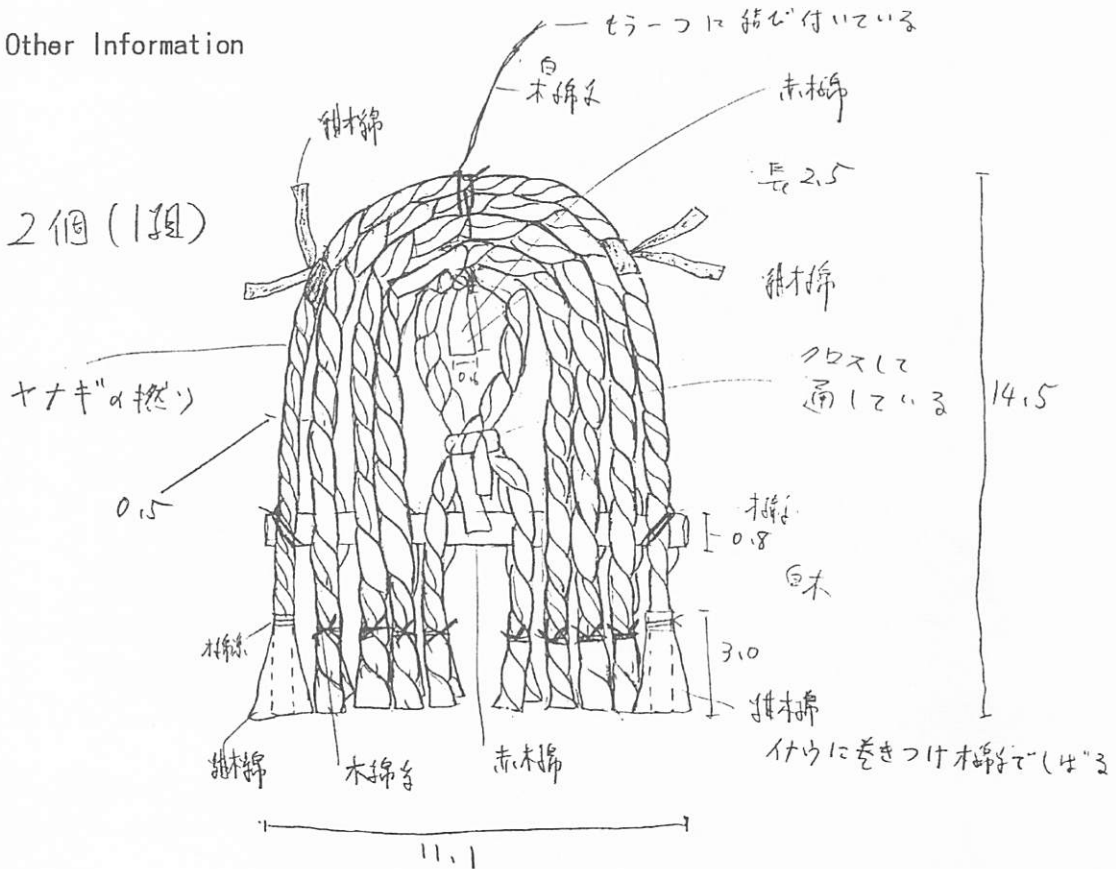
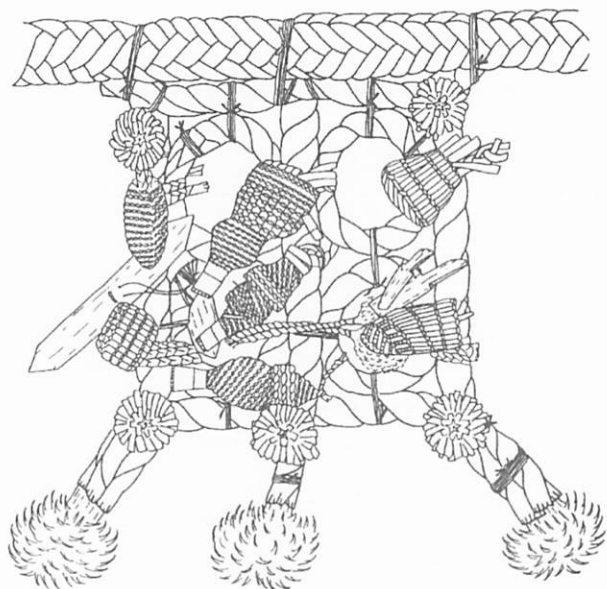


photo 4-62-16~19

By: K. HASE 1995. 08. 14

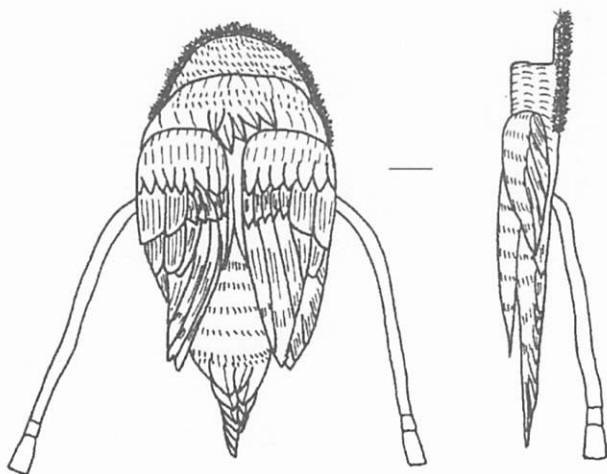
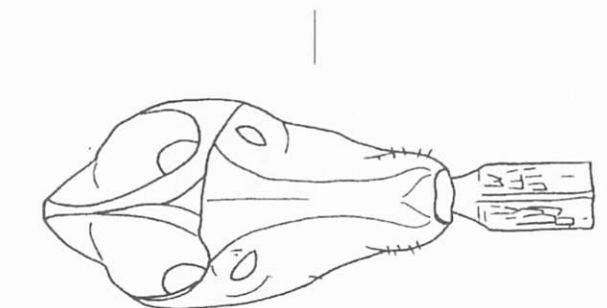
MA 3 資料実測略図



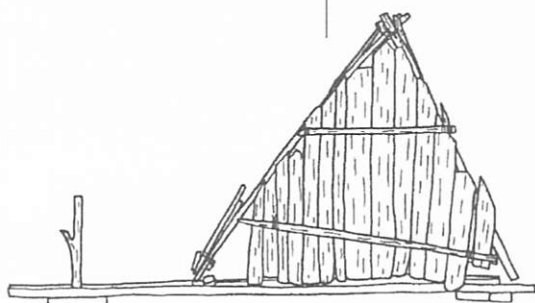
829-339
雄グマの帯
ピウスツキー
東サハリン 1906



839-275
イヌの頭のイナウ
ピウスツキー、シエロシェフスキー
北海道 1904



829-370
帽子
ピウスツキー
東サハリン 1906

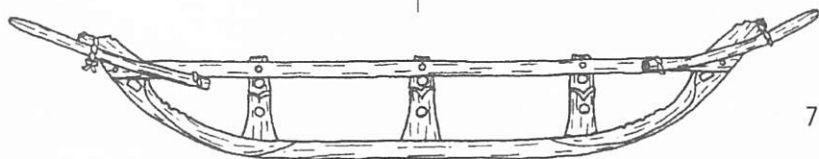
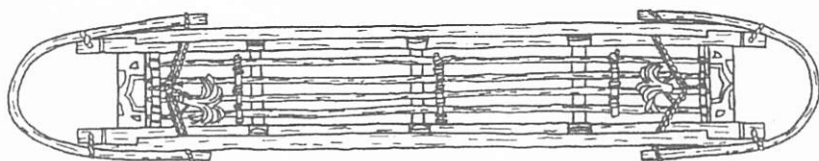


700-27

家模型

ピウスツキー

サハリン東海岸 1903

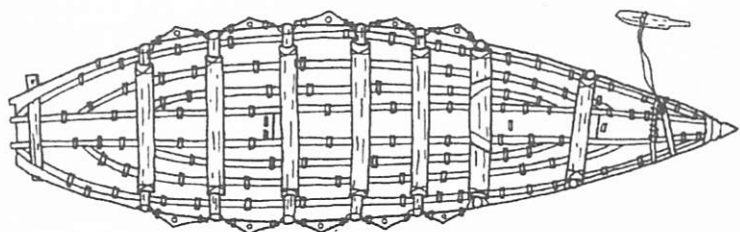
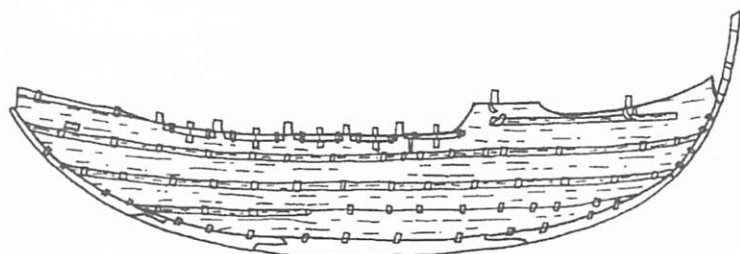


733-10

ソリ模型

マーク、カストレン他

ヤクート・ビリュイ州、ザバイカル地方、サハリン
収蔵年不明

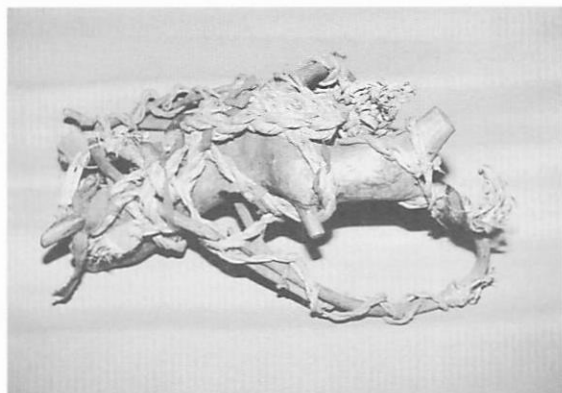


809-22

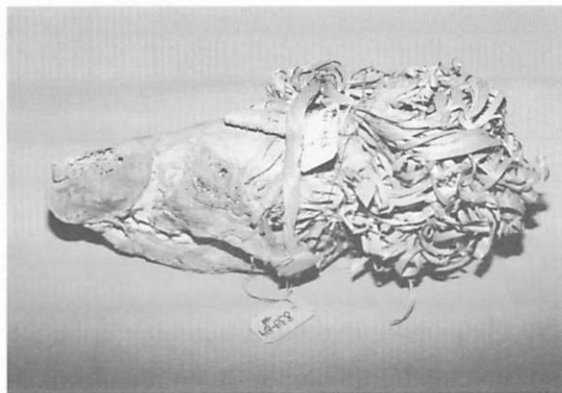
板綴船模型

ヴォズネセンスキー

千島 1840



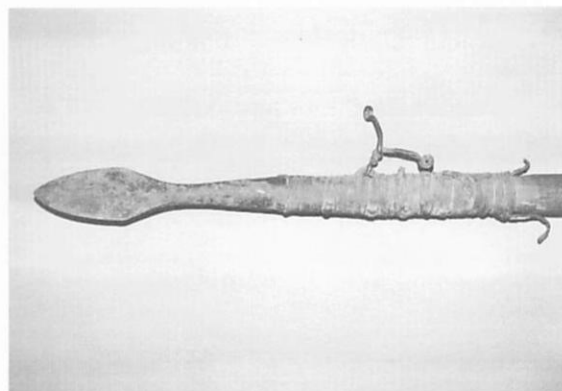
829-396
木偶
ピウスツキー
東サハリン 1906



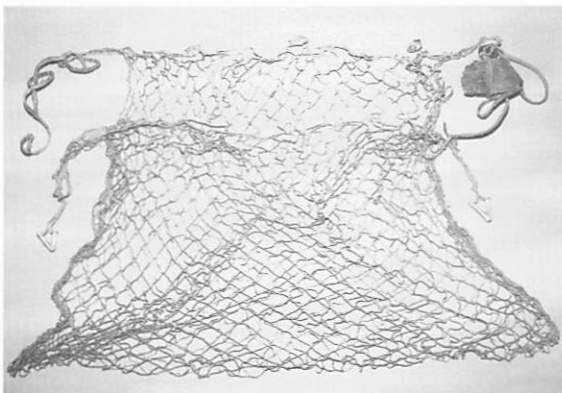
839-194
護符
ピウスツキー、シエロシェフスキー
北海道 1904



839-278 6 / 5
捧酒篋
ピウスツキー、シエロシェフスキー
北海道 1904



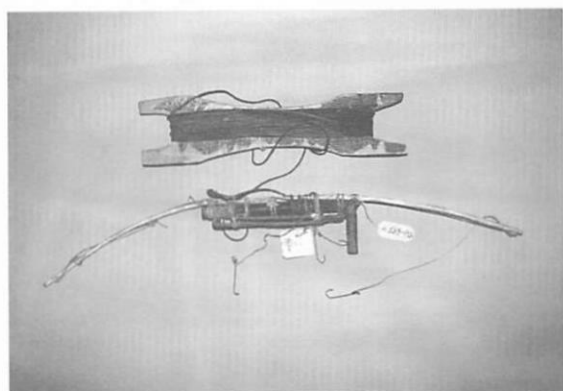
829-347
槍
ピウスツキー
サハリン 1906



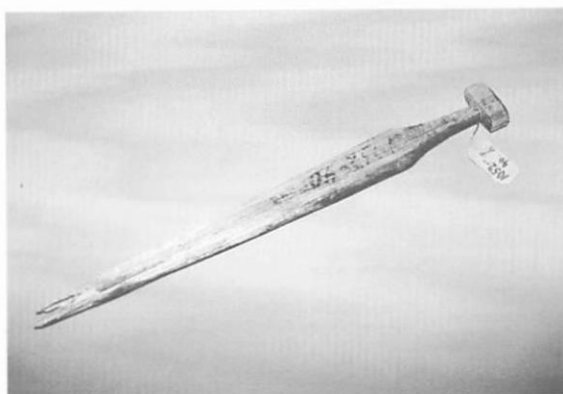
829-439
定置網
ピウスツキー
東サハリン 1906



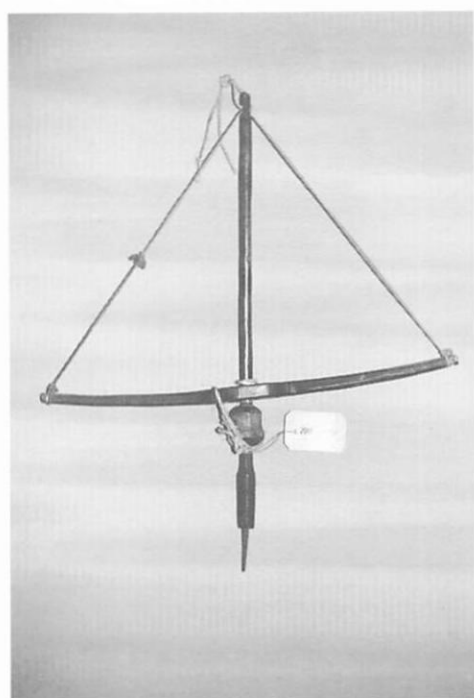
829-512 6
アザラシ狩用おとり模型
ピウスツキー
サハリン 1906



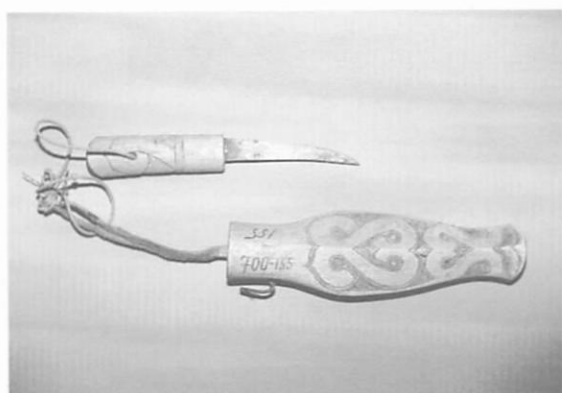
839-143
釣針（釣糸付）
ピウスツキー、シェロシェフスキー
北海道 1904



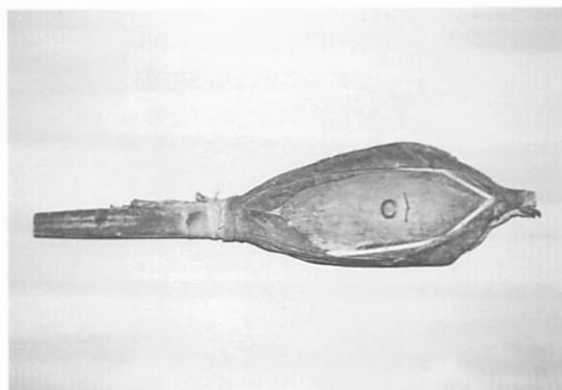
1052-40
根掘り棒
ポリャコフ
南サハリンシスカ 1880



700-130
錐
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



700-155
男性用小刀
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



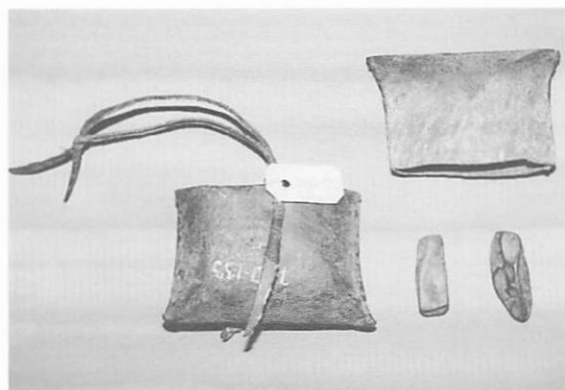
700-222/2
ファイゴ
ピウスツキー
サハリン東海岸 1903



700-10
匙
ピウスツキー
サハリン 1903



700-226
盆
ピウスツキー
サハリン東海岸 1903



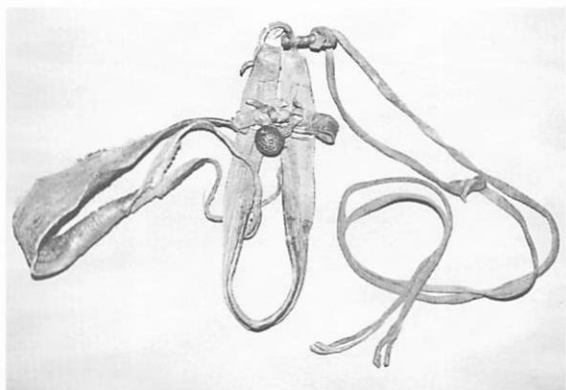
700-133
火打ち入れ
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



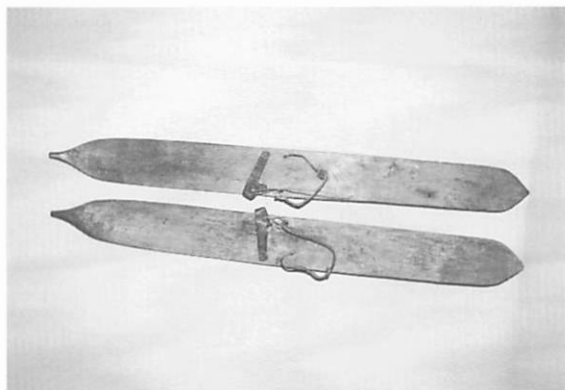
829-489/6
箱容器
ピウスツキー
東サハリン 1906



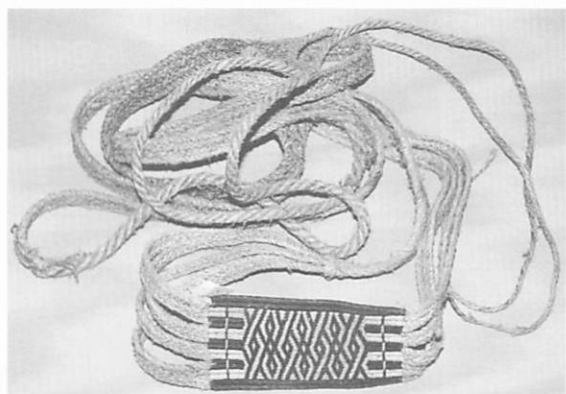
700-154
脂入れ容器
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



700-157
クマ用首輪
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



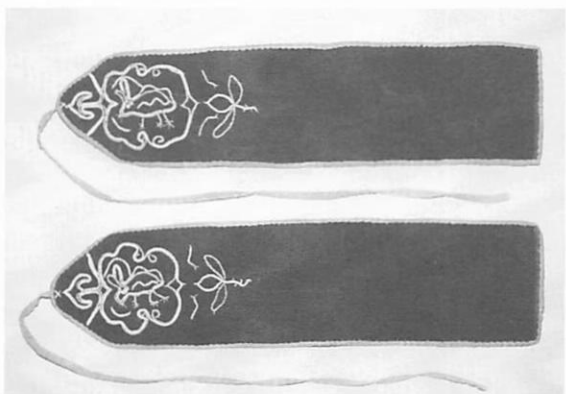
829-496
ソリ用スキー
ピウスツキー
サハリン 1906



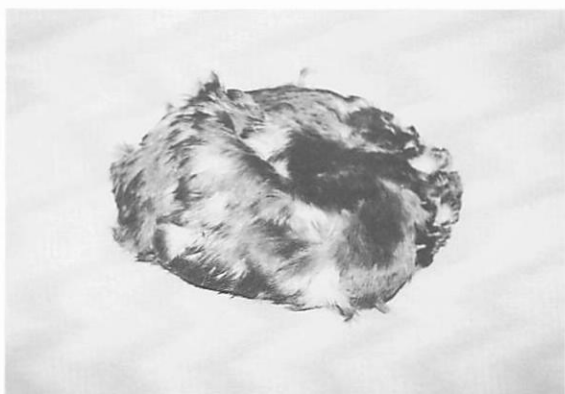
839-22 6
背負い紐
ピウスツキー、シェロシェフスキー
北海道敷生 1904



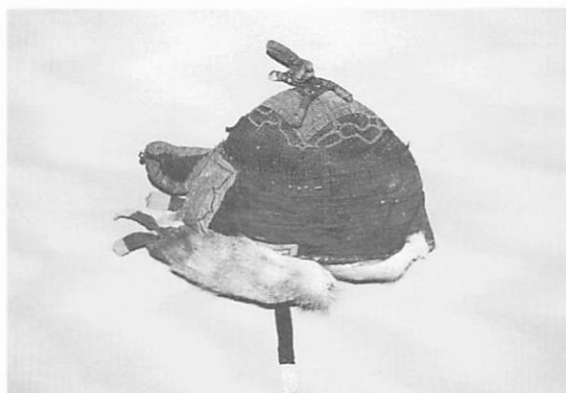
829-520
煙管入れ
ピウスツキー
東サハリン 1906



202-65 a・6
袖口止め
スーブルネンコ
サハリン 1890



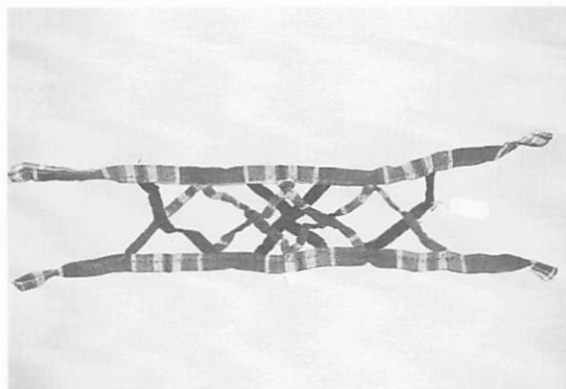
700-7
帽子
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



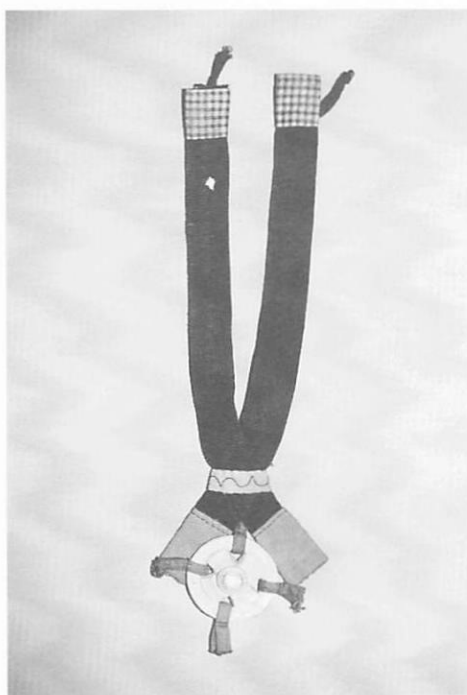
700-39
帽子（冬用）
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



700-184
幣冠
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



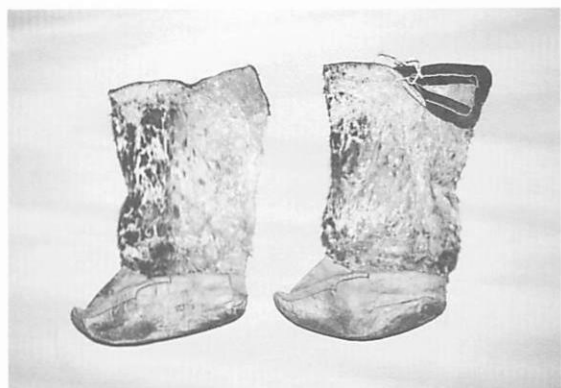
700-251
腹帯
ピウスツキー
サハリン東海岸 1903



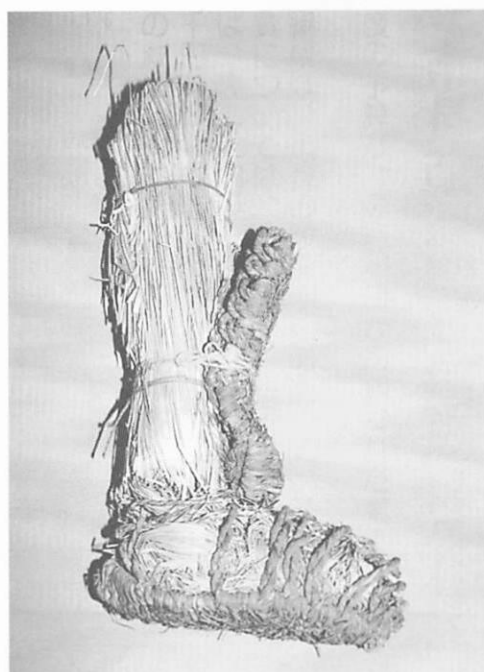
700-308
頸飾帯（護符付き）
ピウスツキー
サハリン東海岸 1903



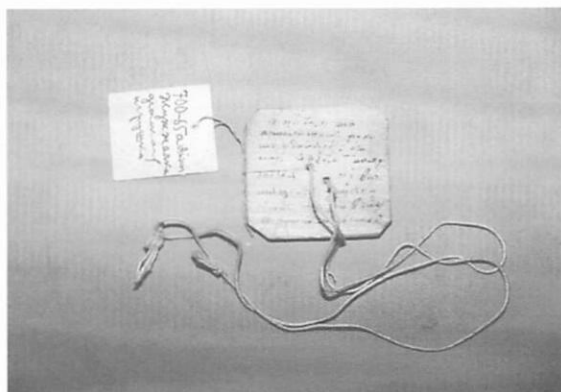
829-368
手袋（男性用）
ピウスツキー
東サハリン 1906



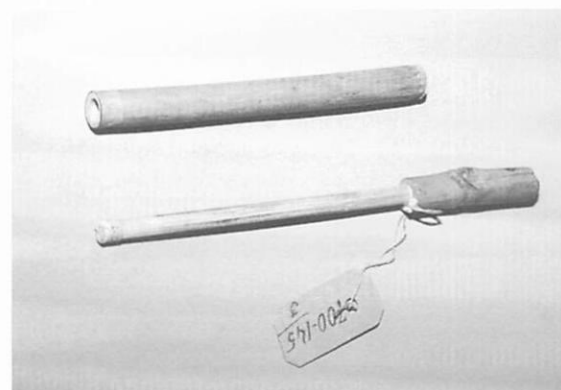
829-391
靴
ピウスツキー
サハリン 1906



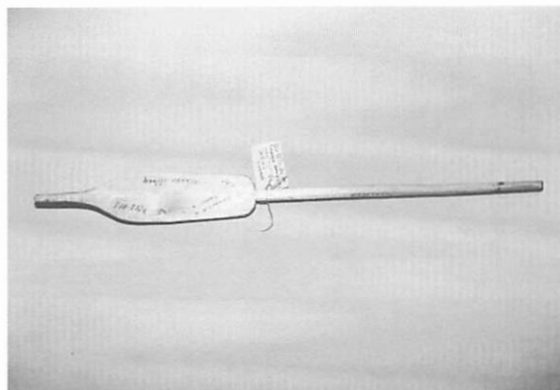
839-97
ワラジ
ピウスツキー、シェロシェフスキー
北海道 1904



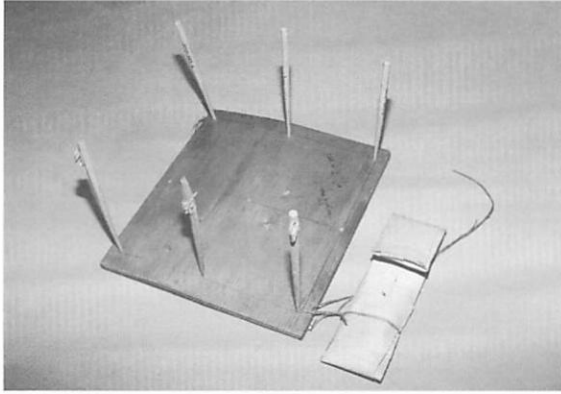
700-65 a
ブンブン独楽（玩具）
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



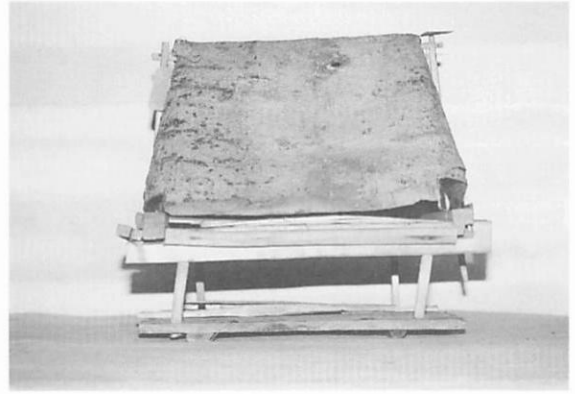
700-145/3
竹鉄砲（玩具）
ピウスツキー
サハリン西海岸マウカ 1903



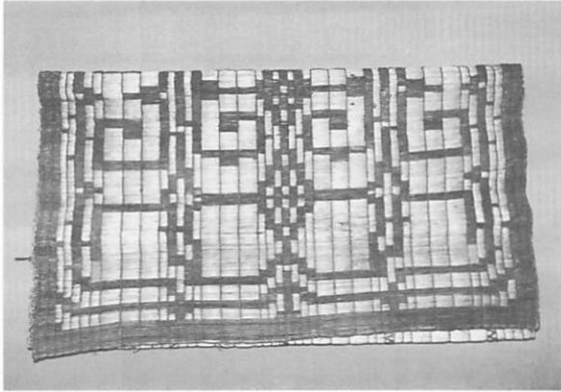
700-257 k
銃（玩具）
ピウスツキー
サハリン東海岸 1903



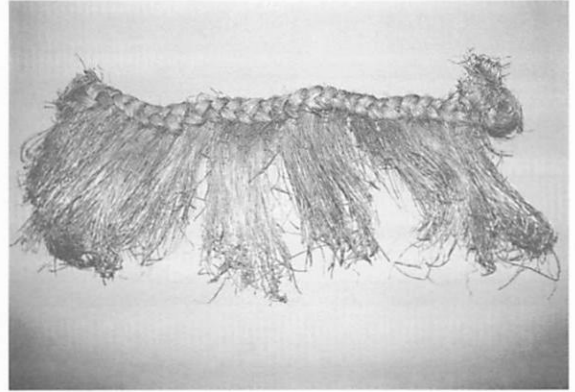
700-279 a・b
方位ゲーム (玩具)
ピウスツキー
サハリン東海岸 1903



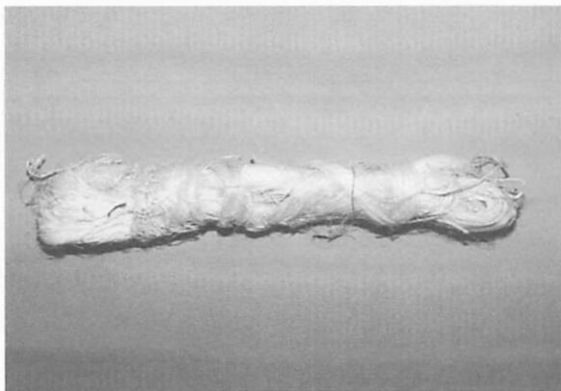
829-429
納屋模型
ピウスツキー
東サハリン 1906



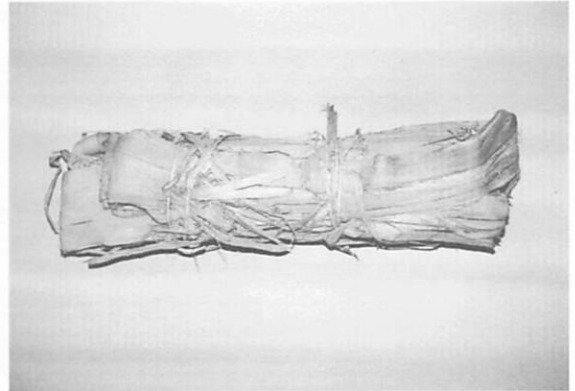
829-539
ゴザ
ピウスツキー
サハリン 1906



209-31
スゲ繊維束
スーブルネンコ
サハリン 1891 (収集)、1896



829-500 r
イラクサ繊維束
ピウスツキー
サハリン 1906



839-6
オヒョウ繊維束
ピウスツキー、シェロシェフスキー
北海道 1904

市立函館博物館 研究紀要 第8号

1998年3月31日 発行

編集・発行 市立函館博物館

〒040-0044 函館市青柳町17-1 (函館公園内)

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

印刷 (有) 三和印刷

〒040-0061 函館市海岸町8-11

TEL 0138-45-0845 FAX 0138-43-3594

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

NO. 8

CONTENTS

Preface

KAZUHIKO MUNAKATA : Botanist Sigezo Sugawara
—Devoted His Life to the Plants
in Northern Islands of Japan—

KAZUHIRO HASEBE : Study of Ainu Materials in Saint Petersburg
—on the “Ainu Collection” in the Peter the
Great Museum of Anthropology Ethnography—

1998

Publisher : Hakodate City Museum

17-1 Aoyagi-cho, Hakodate, Hokkaido, Japan 040-0044

Phone 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831